

組織に参加した、いわゆる「紅二代」に属する指導者である⁽²⁵⁾。習指導部発足の一年前の2011年当時、上海市共産党委員会書記であった俞は学生党员への講話のなかで、文革期に范瑾ら自身の家族や親族が直面した過酷な経験を明らかにした。また、文革についても「歴史決議」以来の公式見解を踏襲する形で、「誤った道」であったと述べた。だが、俞の本心がそれとは異なっていたことは、毛や文革に関する発言により図らずも明らかにされることとなった。俞は、文革期における自身の個人的経験に関わらず、毛による文革の発動について、「新たなブルジョワジーの出現を防ぎ、労働者と農民が再び社会の底辺に転落するのを防ぐため」のものであった、との見方を示した。俞のこの認識は文革を専ら労働者・農民の救済という毛の善意に基づく運動と解釈した点において、「第二回歴史決議」以降の文革を巡る公式見解とは明らかに異なるものであった。そして、俞は「現在の多くの状況」、すなわち21世紀の中国社会における経済格差の拡大等の諸問題の存在を、文革発動を巡る毛の「懸念が理由のないものではなかったことを証明している」証拠と見なすことにより、毛が文革を発動するに至った動機について「過度に非難されるべき程のことではない」との評価を行うのである⁽²⁶⁾。俞のこの認識に同決議との連続性を見出す事は、容易ではない。同様に、文革期における諸事象を念頭に置いた場合、文革発動と毛の動機を巡る俞の発言は、「動機」と「現実」の間の乖離について論理的な説明をなし得るものとは到底、言い難いものであった。

一方、共産党八期十中全会(1962年9月)で「反党集団」成員として失脚した習仲勳(1902~2003.共産党第七期中央候補委員、第十二期中央政治局委員)を父とし、自身も文革期に批判闘争や山西省の農村への下放を経験した習近平は、共産党総書記に就任して間もな

い2013年1月、新任の共産党中央委員会委員、候補委員を対象として、後に「二つの“否定できない”論（兩個“不能否定”論）」として知られる事となる講話を行った。習はそのなかで、「改革開放前と改革開放後の二つの歴史的時期」は「本質的に我が党の指導者が人民を指導し、社会主義建設を進めた実践と探索」の時期であり、「根本的に対立するものではない」とした。習はその上で、「改革開放後の歴史的時期によって改革開放前の歴史的時期を否定することは出来ないし、改革開放前の歴史的時期によって改革開放後の歴史的時期を否定することもできない」との認識を示した⁽²⁷⁾。この講話では、文革への直接的な言及はなされていないものの、「改革開放前の歴史的時期」という時間的区分には文革も含まれることは容易に想定できる。この点から言えば、習近平講話の内容が「第二回歴史決議」以降の文革に関する公式見解と異なるものであることは、明らかであった。この講話は結果的に、習近平指導部と文革との親和性を示す役割を果たしたといつてよい。

俞と習の一連の発言を先述の鄧小平の発言と併せて考えた場合、鄧の予想にはその逝去から十五年前後で早くも誤算が生じたことになる。この状況は、「第二回歴史決議」以降の文革評価が表面上、社会的な支持を獲得したように見えてつても、実際にはその主導者であった鄧の存在感に多分に依拠したものであったことを、結果的に明らかにしたといえよう。換言すれば、鄧小平という存在が去ったことは、同決議以降の文革評価とは異なる認識を密かに抱いていた人々に、公式見解からの「自由」をもたらしたといえるかもしれない。この点から言えば、俞正声の発言が2011年6月、すなわち「第二回歴史決議」の採択からちょうど三十年目になされた事実は、本人がそれを意識していたか否かは別としても、共産党、政府指導者における同決議への認識を量る上で、極めて象徴的であった。

Ⅲ 21世紀中国における「反第二回歴史決議系新左派」の文革再評価論

1) 「新左派」による文革再評価論の展開と「主戦場」としてのインターネット空間

この時期には先述のごとく、「新左派」による文革再評価論の発信が本格化し始めた。本稿における検討対象である「反第二回歴史決議系新左派」の活動も、この時期に本格化している。その特徴としては、そのなかに「紅衛兵」「紅小兵」世代に属する党・政府幹部や知識人らが含まれている点が挙げられるであろう⁽²⁸⁾。彼らは中華人民共和国が成立した1949年前後から1950年代末までの約十年間の間に誕生しており、文革の十年間に十代を過ごしたという共通点を持つ。文革期に十代という多感な時期を過ごし、個人的にも困難な経験を経たであろう人々による文革再評価の論理は、この問題に関して考察する上で示唆に富んでいると思われる。

そこで、以下の部分ではこの点に関して、「反第二回歴史決議系新左派」のウェブサイトなどで文革再評価論を発信している複数の人物の言説を取り上げ、彼らの文革再評価論の論理とその特質について考察する。具体例としては、「紅衛兵」世代の事例として李慎明(1949～)、「紅小兵」世代に関しては張宏良(1955～)、李彬(1959～)、地方幹部については唐青釗(生年不詳)に着目する。これらの人物は2010年代以降、「反第二回歴史決議系新左派」のサイトにおいて、同決議以降の文革に関する公式見解と著しく異なるか、あるいは「歴史決議」の全面的否定を志向した言説を、継続的に発信しているという共通点を有する。特に、李慎明と李彬は2010年代以降、「反第二回歴史決議系」サイトを中心とした「新左派」系インターネットサイト上で文革再評価論を積極的に発信している点に加え、前者が中国社

会科学院副院長(2011 年)、後者が清華大学ニュース・メディア(新聞与伝播)学院教授という経歴を持つことから、「北京二李」と称される⁽²⁹⁾。それ以外の人物についても、「反第二回歴史決議系新左派」サイトなどを通じ、インターネット空間での文革再評価論の展開に少なからぬ役割を果たしたと思われる。

無論、それらは彼等個人の文革認識に基づく言説であり、それをもって各世代における文革認識、特に文革再評価論の典型として一般化し得ないことは、言うまでもない。端的に言えば、それらはその本質において個々の発信者における主観の域を出るものではない。それにも関わらず、インターネット空間でこの種の言説が一定の広がりを見せた事実からは、それらがインターネット利用者を中心とする一部の人々の文革認識、ひいては「反第二回歴史決議」的意識と共鳴し、それゆえに一定の支持を獲得し得たことが窺える。

加えて、「反第二回歴史決議系新左派」による言説の「受け手」としての個々のインターネット利用者の属性が、インターネット空間における匿名性という特徴ゆえに必ずしも明確ではない点からは、「反第二回歴史決議系新左派」の言説が特定の世代に留まらない、より幅広い年代層で受容されている可能性も想定し得るであろう。この点に着目した場合、「紅衛兵」「紅小兵」世代とそれ以外の世代という複数の異なる世代の言説を検討の対象とすることにより、世代差を超越した文革再評価の論理と、それが一定の支持を獲得した理由を見出すことが可能になると思われる。

2) 李慎明にみる「紅衛兵世代」の文革再評価論

a) 李慎明の文革再評価論と俞正声講話

「北京二李」の一人である李慎明は、中華人民共和国が成立した 1949 年 10 月に生まれた。いわゆる「紅旗の下で育った」世代であり、文革期に活動した紅衛兵と同世代である。文革期に十代後半の青年期を迎えた李は、新疆ウイグル自治区の人民解放軍部隊に所属し、“新聞宣伝幹事”として部隊基層首長による“革命大批判”の文章を代筆し、部隊の上長の信頼を得たという。文革後は共産党中央弁公庁、中央軍事委員会弁公庁で王震（人民解放軍上将、1908－1993）の秘書を務めた後、中国社会科学院党委員会党組副書記等を歴任した⁽³⁰⁾。そして 2011 年 11 月、文革を毛沢東の「共産党と政権の変質の阻止を目的とした戦略思想」（以下「戦略思想」）の実践と位置付ける観点から再検討する内容の論文の発表を契機として、「第二回歴史決議」以降の文革評価と一線を画する内容の文革再評価論を、相次いで発信するに至った。その契機となったのが先述の俞正声講話であったことは、「戦略思想」に関する李の論文から垣間見ることが出来る。後述するように、李慎明は「戦略思想」に関する論文において、俞の発言を「肺腑の言と率直無私な品格と思いを示すもの」と称賛した上で、文革を再評価する上での模範として高く評価している⁽³¹⁾。この内容が俞発言の五か月後という比較的早い段階のものである点からは、李慎明が党指導者としての俞の発言から文革再評価の容認へ向けた変化を感じ取り、それに触発される形で自身の認識を発信するに至ったことが窺える。その後、習近平が「二つの“否定できない”論」に言及すると、李は「建国後二十七年の艱難辛苦と、改革開放の歴史を切り離す」ことへの批判を本格化させた⁽³²⁾。以上の経緯を踏まえた場合、李慎明は「反第二回歴史決議系新左派」のなかでも、共産党・政府指導者の文革に関する認識を根拠として自らの文革再評価論をインターネット

上に発信した、トップバッターの存在とみなし得るであろう。

b) 「第二回歴史決議」の継承と強化というロジック

李慎明の文革再評価論は形式上、「第二回歴史決議」及び鄧小平による毛沢東評価への支持を前提として展開される。それは、李が自身の事実上の文革評価の目的を、「歴史決議」と鄧小平の関連講話の精神に依拠し、「毛沢東の晩年の探索と失敗、誤りに対して客観的真相に基づいて是非を見出し、それに見合った評価を行うこと」と位置付けた点にも示されている。李は加えて、「第二回歴史決議」における文革評価が「改革開放と中国の特色ある社会主義の道が得た巨大な成果をもたらした」とする⁽³³⁾。そのため、李の論理においては、「第二回歴史決議」自体が懐疑ないし批判の対象として俎上に上げられることはなく、むしろ一貫して同決議との一致が強調されるのである。その一方、李が「毛沢東の晩年」について、「探索」という概念を「失敗」の前に置いた点からは、同決議に対する李の距離感を垣間見ることができるであろう。実際に、李慎明の真意が「歴史決議と鄧小平講話の精神に依拠」するという、自らが提起した意義付けとは異なっていることは、その後の議論から次第に明らかになるのである。

c) 「戦略思想」の実践における“曲折の過程”と「継続革命論」

李慎明の文革再評価論は、文革を含めた毛沢東による党、国家運営を、毛の「戦略思想」の実践と「その晩年における失敗と試行錯誤の過程」とする見方に立って展開される。

ここで、「第二回歴史決議」への評価と並ぶもう一つのポイントとなるのが、毛沢東が 1962

年に共産党八期六中全会で提起し、文革の指導理念となったいわゆる「プロレタリア独裁下における継続革命論」（「継続革命論」）と、李慎明の「戦略思想」の関連性を巡る問題である。李はこれについて、毛沢東の「戦略思想」と「継続革命論」を異なるものと位置付ける。李は「戦略思想」を、中国革命と中華人民共和国建国後の国家建設の経験を通じて蓄積された、共産党体制と政権の「変質」の阻止を第一義的な目的とした理論とする。李によれば、「戦略思想」は毛沢東が「我が党、軍隊と国家が革命、建設と改革開放の輝かしい成果を成就するために、永遠に滅びる事のない功績を打ち立てた」理論であり、「我が党、国家と人民軍隊にとっての貴重な精神的財産」に他ならない。李はこのような認識に基づき、文革を毛沢東による「戦略思想」の実践の過程とする。李慎明はここに文革の発動を巡る毛の意図の正当性を認めつつ、毛が「階級闘争の深刻性について誤った見通しをした」結果、文革が発生したとするのである。一方、李は「継続革命論」とその性格を象徴する「階級闘争を綱（かなめ）とする」という理念を、「社会主義社会と合致しない」として評価する。李はその上で、「第二回歴史決議」の採択以降それが提起されなくなったことが、その後の「我が党の歴史上、深遠な意義を有する偉大な転換」が可能になったとする。李はこのような論理展開によって「継続革命論」と「戦略思想」の関連性を否定するのみならず、自身の議論における前者の影響の否定を試みるのである⁽³⁴⁾。そして、李は「継続革命論」の否定をその後の改革開放政策への転換と関連付けることにより、改革開放政策に対する自身の賛同をも強調するのである。だが、李は「戦略思想」と「継続革命論」の相違について体系的な議論を展開することは、慎重に回避した。結果的に、この問題に関する李の認識は曖昧なまま残されることとなった。見方を変えれば、李は「継続革命論」への明確な批判を欠いた状態で

新たに「戦略思想」という概念を提起することにより、前者への完全な否定を巧みに回避したといえる。

李慎明はここに、「戦略思想」を毛沢東の「晩年の探索」における「正確な部分」とすることにより、その実践としての文革を事実上、肯定するに至った。これにより、「第二回歴史決議」における文革評価と李のそれとの間には事実上、重大な相違が存在することが明らかになるのである。

d) 「学費」としての文革

上述の論理にも示されるように、李慎明は「第二回歴史決議」と自身の議論の一致を前提とする立場から、文革における「誤り」の存在は否定しない。しかし、李はそこに「戦略思想」の推進という「曲折した探索を進める過程での誤り」としての意義を付与することにより、「いかなる意味でも革命でも進歩でもない」という既存の文革評価と、自身のそれが異なることを示す。それが、たとえば同決議に新たな解釈を加えるといった次元に留まるものでないことは、李が文革を「戦略思想」の「探索と実践のなかで支払った代価であり、我が党が探索と実践のなかで払った“学費”であり、我が党のもう一つの形式の貴重な“財産”」とすることにより、明確なものとなる⁽³⁵⁾。ここには、「第二回歴史決議」における文革全面否定と共通するものは何一つ、存在しないと言っても過言ではない。加えて、それが「学費」や「貴重な“財産”」という概念と共に語られる時、李は事実上、文革を社会進歩の一形態と見なすと共に、文革における「過ち」を共産党体制の安定と社会進歩を加速する上での、一種の経験値とその蓄積として肯定することにより、文革へのいかなる否定的評価をも拒

絶する姿勢を打ち出したといえる。

このように、李は「歴史決議」の枠組みの継承という形式をとり、それをある種の隠れ蓑としつつ、本質的な部分においてそれと相容れない、自身の文革再評価論を構築することに成功したのである。ここに、李慎明の文革再評価論の特質が存在しているといえよう。

3) 「紅小兵世代」の文革再評価論

a) 張宏良と李彬の事例

この世代に属する人物としては張宏良(1955~)と、「北京二李」の一人である李彬(1959~)が挙げられる。張宏良の経歴とその文革再評価論に関しては、張博樹による論考が存在する⁽³⁶⁾。ただ、張博樹が取り上げた張宏良の言説は 2008 年から 2010 年頃までのものであり、それ以降のものは検討対象とされていない。そこで本章ではそれ以降の時期、とくに文革発動五十周年にあたる 2016 年前後の張宏良の文革再評価論について検討する。

張宏良は 2016 年前後から今日まで、主に先述の「烏有之郷」「復興網」において「反第二回歴史決議」の立場からの文革再評価論を発信すると共に、習近平指導部成立以降はアメリカへの批判などのナショナリズム的色彩の濃厚な言説を展開している。このことは、張の文革再評価論の特徴を考える上で、極めて興味深い事実であるといえよう。一方、李彬は、「第二回歴史決議」がその後の中国社会に「自信の喪失」をもたらしたとの認識に基づき、同決議以降の文革評価を批判している。後述するように、両者の文革再評価論はその語彙も含めて主観的、扇動的性格が極めて強く、論理性や事実への重視よりも感情的な性格が顕著

である。やや厳しい見方をすれば、李と張の議論はいずれも客観的な検証に耐えうるものではない。反面、両者の議論は「反第二回歴史決議系新左派」の文革再評価論の特質を知る上で、重要な示唆を提示していると考えられる。

b) 「毛派」における「反第二回歴史決議」とナショナリズムの結合

張宏良と李彬の文革再評価論の特徴としては、表面上「第二回歴史決議」への擁護を前提とした李慎明と異なり、同決議自体を批判の対象としていることが挙げられる。

「毛派」を自認する張宏良は、「第二回歴史決議」を中国共産党内の「反毛勢力」、すなわち「反毛沢東派」による文革と毛沢東への全面否定の試みとみなす。張はこのような理解に基づき、それに対抗する勢力としての「毛派」の結集による同決議の撤回と、新たな「歴史決議」の採択により文革の名誉回復と全面的な肯定の実現を目指す⁽³⁷⁾。加えて、その論理が中国人の民族的自尊心と反米的ナショナリズムとの結合により展開されている点に、張宏良の文革再評価論の特徴が存在している。これは、この時点で既にインターネット上に出現していた、文革への否定を「反マルクス・レーニン主義、反プロレタリア革命、反中華人民共和国」的行為とする言説と軌を一にするものであった⁽³⁸⁾。その点において、張宏良の論理とインターネット空間での文革再評価論との間には、一種の共振関係とでもいうべき性格を見出し得るであろう。

張は、「第二回歴史決議」以降の中国における文革評価を「毛沢東思想を否定し、マルクス主義を否定する」ことを目的としたものと断定する。張にとって、同決議は中国共産党と中国人にそれぞれに「十年の内乱を起こした政党、歴史的な合法性を持たない政党」、「十年

の動乱を起こした民族、ただ悔いるしかない民族」という烙印を押すもの以外の何物でもなく、到底容認できるものではない⁽³⁹⁾。張はこのような立場から、同決議を単に共産党のみならず、中国人全体をも貶めるものとする。「第二回歴史決議」を巡る問題はこれにより、政治・社会運動としての文革への評価の是非という枠を超え、中国人の民族的自尊心との関わりという、新たな性格を帯びることとなる。

張はこのような論理に基づき、「第二回歴史決議」を「敵対勢力と国内極右勢力が中国を屠り殺す政治的な刀」として非難し、拒絶する⁽⁴⁰⁾。張はここから、同決議を「鄧小平あるいは誰かの個人的品性や人格」によるものではなく、「当時の老幹部と文化エリートの共通利益」に基づくものと断ずるのである。張によれば、それら「文化エリート」とは「アメリカが育てた親米派」であり、彼等による同決議の起草と採択は「アメリカの政治的意図の実行」に他ならない⁽⁴¹⁾。ここで、「歴史決議」に対する張の反発は突如、反米的感情と結びつくのである。張のこの論理はその内容が何らの具体的根拠を伴わない点において、論理的批判に耐え得るものでは到底、ありえない。一方で、同決議への是非という、本来であれば中国国内の政治・社会問題に属するはずの議論をナショナリズムの感情と結合させ、かつ同決議がある種の外圧の結果とみなす張の認識は、「反第二回歴史決議系新左派」の文革再評価論における中華民族主義的感情の影響と、今後の中国における文革理解の方向性を考える上で、興味深い事例といえるであろう。

張宏良は以上のような観点から、「第二回歴史決議」の採択を「共産党の最も愚かな自殺行為」とみなし、「“文革全面否定”という致命的なコブの除去」による「党と国家の健全化」を実現すべきとの主張を展開するのである⁽⁴²⁾。ここに至り、張の文革再評価論は同決議へ

の是非に留まらない、民族的自尊心の回復へ向けた重要な構成要素として正当化されるのである。張はまた、鄧小平と改革開放政策の前後それぞれの「三十年」に対して「歴史決議を行うことが出来ないならば」、中国が「1840年」すなわちアヘン戦争(1840)以来の「最大の代価を支払うことになる」との認識を示す⁽⁴³⁾。ここからは、同決議に対する否定を将来における中国人の存続の鍵と位置付ける、極めて主観的な発想が容易に見出せるであろう。同様に、この問題をアヘン戦争という、文革と何らの直接的接点を持たない問題と関連付ける論理展開からは、中国人のナショナリズム的意識に訴えかけることにより「第二回歴史決議」の撤回を目指す、張の方向性が、明らかになる。

ここに、張宏良の「反第二回歴史決議」の論理は政治・社会現象としての文革に対する評価という本来の性格と無関係に、ナショナリズムと融合することにより、中華民族主義的観点からの文革肯定論とでもいうべき性格を有することになるのである。そして、それらが何らの論理的整合性をも示し得ない点に、張の文革再評価論の特徴が存在している。

㉔李彬にみる“中国の自信”の回復と「二つの“否定できない”論」

それに対して、「北京二李」の一人である李彬は文革を「重大な失敗と誤り」とすることにより、表面上は「第二回歴史決議」以降の文革評価と自身の文革再評価論との一致を示す。これは一見、張宏良よりもむしろ李慎明の姿勢に近いようにみえる。しかし、李彬の真意がそこにはない事は、「歴史決議」以降の文革認識、特に文革を「顧み反省する（原文は「反思」）」試みが、改革開放政策以前の「前半三十年」に対する「空虚化」と、「後半三十年」の「中国の道、理論、制度」に対する自信の喪失という事態を招いたとする言説に、端的に

示されている⁽⁴⁴⁾。その上で李彬は、「文革の十年を“災難”という言葉でまとめることは、適切ではない」との表現により、事実上「第二回歴史決議」を批判するのである⁽⁴⁵⁾。李彬にとって「第二回歴史決議」とは、中華人民共和国成立以降の国家建設に対する自己否定であり、「自信喪失」をもたらした元凶に他ならない。こうして、李彬の反「第二回歴史決議」の論理と文革再評価論は、同決議により失われた“中国の自信”の回復を至上命題として展開されることとなるのである。

李彬のこのような主張の根拠となったのが、習近平の「二つの“否定できない”論」であった。李彬はこれに関して、「二つの“否定できない”論」が従来の文革評価における潜在的限界の存在を明らかにしたとして、その意義を評価する⁽⁴⁶⁾。李彬はここに、「二つの“否定できない”論」を根拠として文革再評価論を展開するのである。そして、習近平の「二つの“否定できない”論」を援用する形で、「第二回歴史決議」以降の歴史認識が中華人民共和国の成立から改革開放に至るまでの「前半三十年」に対する「空虚化」をもたらした、との認識を示す時、李彬は事実上、習の論理との一致という形をとる事により、自身の文革再評価論を正当化することに成功したといえる。

d) “中国の自信”の回復と、回避された“不都合な”事実

李彬はこのような認識に立ち、文革における「失敗と誤り」を「中国の道を模索するなかでの誤り」と位置付ける⁽⁴⁷⁾。それにより、「第二回歴史決議」以降の文革評価と距離を置く姿勢を示す。李はその上で、文革期の「政治上の誤った理論、実践」と経済建設などの「成果」を切り離し、後者を積極的に評価する。李がその具体例として挙げたのが、「水爆とミ

サイル、人工衛星（＝「兩彈一星」）」の開発や中華人民共和国の国連代表権獲得(1971)に加え、「王蒙の茅盾文学賞作品『こちらの風景（這辺風景）』、ピアノ交響曲『黄河』」等であった⁽⁴⁸⁾。これらは李彬が「歴史決議」を否定し、かつ自身の文革再評価論を展開する上での有力な根拠に他ならない。

一方で、中国が「1949 年から 1977 年までに建国以来の巨大な発展期を迎えた」との認識を示す時、李は 1978 年から開始された改革開放政策の意義を、極めて強い確信をもって無視したといってよい。同様に、李は王蒙の小説を文革の「成果」と位置付ける反面、文革という「左に左を重ね、誤りに誤りを重ねた時代」に、小説の執筆のなかに「合理的に極左を批判し、極左を告発する機会」を見出すと共に、「文学によって「極左」を讃えることへの拒絶」を同作の執筆の目的と述べた王蒙の発言には、一言も触れなかったのである⁽⁴⁹⁾。

また、同作が文革の終結から三十七年後の 2013 年に初めて出版の機会を得たという事実に向き合うことをも、巧妙に回避した⁽⁵⁰⁾。そして、李彬は文革の本質を「大同世界の実現」と評価することにより、「第二回歴史決議」以降の文革評価を完全に拒絶するのである⁽⁵¹⁾。李彬がこのような、極めて主観的な認識によって文革を肯定する時、文革によって生じた人的、社会的損失に向き合う姿勢や、毛沢東時代の中国と日本や台湾、香港、韓国、シンガポールとの間に生じた経済格差に象徴される、鄧小平らに改革開放政策の必要性を痛感させた事実への深刻な理解は存在しないか、意図的に拒絶されたといえる。

このように、「二つの“否定できない”論」を根拠とし、かつ毛沢東時代とくに文革とそれに関わる事象を巧みに取捨選択し極めて主観的な評価を行った点に、李彬による文革再評価論の特徴が存在している。このような方法論に基づく文革再評価論は張宏良のそれと

同様、客観的事実に基づく検証に耐え得るものではない。それにも関わらずこのような議論を展開する時、李彬は文革を巡る自らの「信念」を「事実」に優先させると共に、文革の歴史を極めて恣意的な形で再生産したのだといえよう。そこには、「第二回歴史決議」における文革評価と同様、「事実」への尊重という姿勢は存在し得ない。その意味において、李彬の文革再評価論は、本質的には同決議と同様、歴史に対する恣意的解釈という域を超えるものでないといえるであろう。それを明らかにした点に、李彬における文革再評価論の意義が存在するといえるかもしれない。

4) 唐青釗にみる地方幹部の文革再評価論

a) 唐青釗における「“二つの否定できない”論」と「継続革命論」

地方幹部による文革再評価論の典型例と評価し得るのが、唐青釗の言説である。唐の詳細な経歴は明らかでないが、2018年時点においては「湖南省零陵県の郷鎮老幹部」とされている⁽⁵²⁾。先述の馬賓と異なり、中央政府関連部門での職務経歴は存在しないと思われる。この点から言えば、唐の中央に対するインパクトは馬賓には及ばないであろう。一方で、唐は2010年前後から「新左派」系インターネットサイトや左派系研究会等で、毛沢東時代や文革を再評価する論文を数多く、発表している。そのため、インターネットを中心とした文革再評価論という点では、その知名度と存在感は決して低くはないと思われる。

唐青釗の文革再評価論の特徴としては、「二つの“否定できない”論」を理論的根拠とすることに加え、「継続革命論」を積極的に評価している点が挙げられる。このうち前者に関

して唐は、二つの“否定できない”論」を習近平による「文革の歴史に関する新たな史観、認識であり、文革の歴史を研究する具体的な指導思想」とする⁽⁵³⁾。これにより、「二つの“否定できない”論」に依拠する形で「第二回歴史決議」以降の文革評価に対する逆転を目指す唐の意図が、明確に示されることとなるのである。また、後述するように、「継続革命論」についても李慎明が「戦略思想」と「継続革命論」の関連性を否定し、それ以上の議論を回避したのに対し、唐の場合はむしろ「継続革命論」への評価を自身の文革再評価論の構成要素の一つとした点に、特徴がある。

b) 「第二回歴史決議」批判の突破口としての「継続革命論」

唐青釗による「第二回歴史決議」への批判は、「継続革命論」に対する肯定と表裏一体の論理をもって展開される。唐は同決議とそれ以降の文革を巡る公式見解について、改革開放政策への転換以降、文革に対する「訴え」が文革を巡る叙述の主流を占めてきたとした上で、「覚醒した人民はもはや、そのようなあやふやな話しを聞かなくなった」とする⁽⁵⁴⁾。唐は同時に、同決議以降の文革評価を事実上、鄧小平の個人的意向に沿うものと位置付けることにより、共産党の公式見解としての正当性の否定を試みるのである⁽⁵⁵⁾。

唐はこのような立場から、「第二回歴史決議」への批判を展開する。その突破口となるのが、「継続革命論」への評価を巡る問題である。唐青釗は先述の李慎明と異なり、「継続革命論」への全面的擁護を前提として文革再評価論を展開する。唐によれば、「継続革命論」は毛沢東が「全面的にマルクス・レーニン主義を継承し発展させたプロレタリア独裁の学説」である⁽⁵⁶⁾。この見方に立てば、「継続革命論」を「“社会主義体制下で、一つの階級が一つの

階級を覆す”誤った理論」とする同決議以降の評価は、唐にとって容認し得るものではない⁽⁵⁷⁾。これを李慎明の言説と対比した場合、李は文革を毛沢東による社会主義建設の「探索の過程」と位置付けつつ、一方で「継続革命論」への否定的姿勢を示すことにより、ある種の慎重さをもって文革再評価論の展開を試みたといえる。それに対し、唐青釗の言説から同様の方向性を見出す事は極めて難しい。逆に、唐が「一部の大人物がそれを“誤った理論”であると評価したからといって、“誤った理論”に変わる事はありません」と断言する時、唐の論理は単に「継続革命論」への擁護のみならず、「大人物」による文革評価への異論という性格を帯びることとなる⁽⁵⁸⁾。そして、それが「第二回歴史決議」を鄧小平の政治的影響の産物とする評価と結びつく時、同決議以降の文革評価ひいては鄧が主導した改革開放政策を全面的に拒絶する唐青釗の姿勢が、鮮明なものとなるのである。

c) 「政治革命」と「煉獄」としての文革

その点を踏まえた場合、唐が「第二回歴史決議」によって「文革に被せられた“罪名”」の多くを、文革全面否定を目的として「誇張」ないし「捏造」された「事実と反するもの」と断定し、強硬な言辞によって反論するのは、当然の論理的帰結といえる⁽⁵⁹⁾。唐の立場から見れば、同決議以降の文革評価は、「党の指導下での偉大な自己革命」としての文革を「凄惨なこの世の地獄」と描く点において、許容し得るものではない⁽⁶⁰⁾。反対に、「継続革命論」を「輝かしい理論」と見なす唐にとって、文革とは「プロレタリア独裁の強化、資本主義復活の阻止、社会主義建設」などを軸とした、「社会主義に対する偉大な探索」に他ならない⁽⁶¹⁾。唐はまた、ダンテの『神曲』『煉獄編』第二十七曲の「この時喜べる神の使者我等の前

に現れぬ 彼等焰の外岸の上に立ちて、心の清き者は福なりとうたふ」という一説を引用する⁽⁶²⁾。唐はそれを踏まえ、文革を「現実の理想世界」としての社会主義の建設と共産主義の実現へ向けて、中国と中国共産党そして中国人全体が通過すべき「煉獄」に譬える⁽⁶³⁾。唐はここに、「理想社会」の実現の過程において不可欠な通過点としての意義を、文革及びそれに伴う人的、社会的損失や人的犠牲のなかに見出すのである⁽⁶⁴⁾。

このような認識に立つならば、唐が文革を「十年の動乱」ではなく、「億万人民に複雑で尖鋭な階級闘争と路線闘争の鍛錬を受け入れさせ、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を空前の規模で深く人心に浸透させ」、「中国のプロレタリア独裁がその“魂”を新たにすることのための試みとする結論に至るのは、至極当然といえる⁽⁶⁵⁾。ここに、唐の文革認識が「第二回歴史決議」とは本質的に相容れないのみならず、挑戦的な性格すら孕んだものであることが明らかになる。実際、唐が文革を「人民群眾が毛沢東と中国共産党の指導下において、自身で自身を教育した人民民主運動」であり、「中国人民の共通の願望、共同の行動」と評価する時、そこに同決議との一致点は事実上、存在しない⁽⁶⁶⁾。

更にいえば、それが単に「第二回歴史決議」以降の文革評価に対する逆転と文革への再評価以上の意図を含んでいることは、文革の「偉大さ」を巡る唐の評価からも窺える。唐によれば、「文革の偉大さ」は「その矛先が党内の資本主義の道を歩む実権派、ブルジョワジーの意識形態を代表する反動的権威、ブルジョワジーの利害集団」へ向けられたことにある⁽⁶⁷⁾。それが文革という過去の政治・社会現象への評価の域に留まるものではないことは、上述の事象が「今日の官僚エリート、ブルジョワジーエリートと学術エリートによる“鉄のトライアングル”」に対する批判と同列のものとされた点からも、見出すことができる。唐

はここに、21世紀中国における諸問題を文革に仮託して批判し、さらに文革路線への回帰にその解決への道筋を見出したといえる。それは、文革を既に「歴史」となった「内乱」としてではなく、「現実を照らし未来を照射する」「偉大な歴史的変化」への原動力とする評価へと結びつく。唐はその上で、「未来の歴史は、やはり文革から経験と教訓をくみ取るであろう」との認識を示すのである⁽⁶⁸⁾。唐はそれにより、「第二回歴史決議」的な文革評価を拒絶するのみならず、文革と「継続革命論」が将来の中国に影響を及ぼすことへの、自身の期待をも表明したといえよう。

IV 文革否定論への反駁と「痛み」を巡る問題

1) “克服”されるべき「個人的得失」

「反第二回歴史決議系新左派」のこのような論理から言えば、文革の過程において実際に出現した人的、社会的損失や個々人における精神的トラウマ等は、文革の「成果」とは比較し得ない副次的事象にすぎない。

李慎明は、「新中国の前半二十七年の失敗や過ちを否定しないわけにはいかないし、毛沢東の誤りを弁護することは出来ない」としつつも、文革を含む毛沢東時代への評価が「個人的な得失の立場に立って」なされることに、批判的な見方を示す⁽⁶⁹⁾。李は自身も1960年代初期に、毛沢東の政策の失敗により個人的困難を経験した事実を否定しない。しかし、李にとってそれは「個人的な得失の立場」の域を出るものではないがゆえに、「建国後の毛沢東時代の二十七年の艱難と労苦、奮闘」とその後の改革開放政策を個別に評価し、前者を否定

する根拠とはなりえない⁽⁷⁰⁾。同様に、李は毛の「誤り」についても「領袖個人を過度に責めるべきではない」とする⁽⁷¹⁾。李はこの立場から、「歴史唯物主義と弁証法的唯物主義的立場、観点と方法」によってこそ、文革に関する「相応な評価」が可能になる、とする。李によれば、その際に必要なのは「毛沢東が党と人民に対して行った重要な、重大な貢献」を積極的に評価することである⁽⁷²⁾。ここに、毛沢東の「貢献」と文革期における人的、社会的損失を対比させた上で前者への評価の重要性を掲げつつ、後者を毛の「貢献」とは次元の異なる「個人的得失」と位置付けることにより、その矮小化を図る李の意図が明らかになる。そこに、文革による人的、社会的損失とその結果として人々の間に生じた身体的、心理的な「痛み」への共感を見出すことは、極めて難しい。

加えて、李が「自分あるいは自分の身内が辱めを受けたからといって、我が党の輝かしい歴史を否定し、毛沢東と毛沢東思想の偉大さを否定することは出来ない」とする時、個人的経験に基づく文革への批判は、その当事者の私的感情という領域に留まらない行為と見なされることとなる⁽⁷³⁾。李のこの論理は、個人的経験に基づく文革への批判を「個人的得失」という私的動機に基づくものと見なす一方、同時にそれを毛沢東への評価と同一視することにより、当事者に事実上、自身の経験と毛沢東の「功績」への評価の間での二者択一を迫るものといえる。それが本質的な部分において、当事者に文革の「痛み」への甘受ないしは積極的な受容を求める発想に起因するものであることは、先述の俞正声講話を巡る李の評価に、端的に示されている。李は、文革と毛沢東を巡る俞の講話を「肺腑の言と率直無私の品格と思いは、我々が学び、深く思いを致すべきもの」と称賛する⁽⁷⁴⁾。李にとって、家族の自死を含む過酷な経験にも関わらず文革と毛沢東を評価とした俞の姿勢は、自身の「個人的

得失」を超越した点で、「我々」すなわち21世紀の中国人にとっての文革再評価の模範そのものである。そして、李慎明がそれと同様の心構えを愈以外の文革経験者にも当然のものとして求める時、そこには文革における人的、社会的損失や犠牲とその結果として個人が背負うこととなった肉体的、精神的な「痛み」、さらにはそのような個人の思いに対するまなざしが存在する余地は、もはや残されていないといえる。

2) 「中国人」としての“正しさ”のバロメーター

一方、唐青釗は、文革における「深刻な過ち」や、労働者・農民・学生等による「一部の幹部、学術エリートへの傷害行為」の存在を認めつつも、それらを文革の負の側面と位置付けることを慎重に回避する⁽⁷⁵⁾。唐によれば、それらの事例は「新中国ないし人類の偉大な歴史的出来事」としての文革の価値を損ねるものではない⁽⁷⁶⁾。唐はこのような認識に立ち、「唯物論的弁証法的態度をとる人」と「いわゆる“理性の光”の態度をとる人」を対置させた上で、前者は文革に対して「肯定的態度をとるであろう」と断言する⁽⁷⁷⁾。そして、唐は文革への評価の在り方を「現在の中国の各党派、各階級、各階層、各種の人々の思想、魂、精神の価値尺度」と位置付けるのである⁽⁷⁸⁾。ここには、批判的観点から文革を理解する人々とその価値観を受け入れる余地は事実上、存在しないといってよい。本来、この「尺度」は唐の主観に基づくものであり、一般化し得るものではない。しかし、唐はそれを文革評価に関して人々がとるべき基準として当然視することにより、「中国人」としての「正しさ」を測るバロメーターとしての性格を帯びさせたといえよう。そして、それが「思想、魂、精神の価値尺度」とされるに及び、文革評価は文革という過去の事実を巡る認識という次元を超

え、この問題に向き合う個人の倫理観、道徳観と不可分の関係を有する事柄としての意味を持つことになる。このような見方に立つならば、人的、社会的損失という事実に基づく文革批判はその論理的帰結として、「中国人」としての倫理観、道徳観と相容れないものとして評価されることとならざるを得ない。これは、「第二回歴史決議」への否定を「中華民族の自信」の回復と結びつけた、先述の張宏良の言説にも共通する論理といえる⁽⁷⁹⁾。当然ながら、そこには文革による人的、社会的損失と個人が背負った「痛み」へのまなざしは、存在し得ない。

張宏良の文革再評価論は、「中華民族の自信」の回復とその象徴的存在としての毛沢東への名誉回復を至上命題として展開される。それは張にとって、「反毛勢力」による「第二回歴史決議」を撤回へと追い込んだ上で、文革への全面的肯定を実現し、共産党と中国人民解放軍そして中国全体に「毛主席の晩年には“深刻な過ち”はなかった」と「認めさせる」ことに他ならない⁽⁸⁰⁾。見方を換えれば、毛沢東と文革への肯定的評価を減らす可能性のある事実に向き合うことは、張にとっての関心ではあり得ない。そして、張のこのような論理から言えば、個人的な経験に基づく文革に対する批判はその論理的帰結として、それとは相容れない一種の非民族的行為と見なされる。この段階で、個人の私的経験やそれに基づく感情は、「中華民族の自信」の回復という「大義」の前に圧倒されることとなる。そこには、無数の人々が背負った文革の「痛み」に向き合う姿勢が存在する余地は、残されていないのである。

ハンナ・アレントは、「共同で行われた行為」に対する個人の責任を「集団責任」という観点から論じた際、集団責任が問われる条件として「わたしが実行していないことについて

責任を問われること」、「わたしが責任を負うべき理由は、集団（組織）に所属していることであり、わたしの自発的行為ではこの集団から離脱できないこと」を挙げる。その上で、この種の責任は「つねに政治的なもの」であり、「共同体の全体が、どの成員の実行した行為にたいしても責任を負うような古い形の責任であることも、共同体の名において責任が問われることもある」とする⁽⁸¹⁾。アレントはまた、そのような「集団責任」が「いかなる信念もなく、ただ当時の体制に「同調した」だけの人々によって、真の道徳的問題が発生した事を見逃すべきではない」と指摘する⁽⁸²⁾。アレントにとって、ある時代の特殊な政治的、社会的雰囲気は、一般市民の反動的行為への免罪符とはなり得ないのである。アレントのこの見方を踏まえた場合、文革を経験した「絶対多数の中国人」は程度の差こそあれ文革に関与したがゆえに、全ての責任を逃れ得る存在ではありえないということになるであろう。ここに、文革を巡る責任は個々の当事者のみならず、全ての中国人にとっての「集団責任」としての性格を有することとなる。そして、文革を自らも担うべき「集団責任」として理解し思いを致す時、中国人は文革が残したトラウマの克服へ向けて一步を歩み出すことになるのである⁽⁸³⁾。文革に伴う人的、社会的損失等の事実を直視する意味がこの点にあるとするならば、「反第二回歴史決議系新左派」知識人らの文革再評価論は、まさにその対極に存在するといえる。特に、李慎明の言説は自身や俞正声の個人的経験という、文革当時の政治的、社会的背景に起因する事柄を根拠として「第二回歴史決議」以降の文革否定論に異議を唱え、同時にそれらを事実上の免罪符として文革の再評価を図る点において、「集団責任」を巡るアレントの認識とは完全に異なるものといえる。このような立場からの文革再評価論がなされる時、文革による人的、社会的損失と人的犠牲は社会の発展の代償として肯定される一方、

その背後における「個」とその数だけ存在するはずの「痛み」は抽象化され、文革の「成果」の前に埋没することを余儀なくされるのである。それはまさに、文革に伴う「痛み」という不可視の苦しみを背負いながら生き続ける人々に対して、「中国人」としての「正しさ」という大義名分によりその甘受を強いるに等しいものと言わざるを得ない。

「第二回歴史決議」における文革否定は当時の中国の政治状況を優先させ、共産党や毛沢東の責任への全面的検証を回避した点において、不十分なものであった。反面、その後は犠牲者への名誉回復などが不十分ながら実施されたのも、事実である。それに対し、「反第二回歴史決議系新左派」知識人らの言説は、そもそも文革を「反省」という概念と結びつけること自体を拒絶する点において、より本質的な部分での責任回避の試みとしての性格を帯びることとなるのである。そして、それが改革開放政策への否定をも含む形で発信された時、社会における「第二回歴史決議」と文革否定論の受容を前提として、将来的なその修正を容認したであろう鄧小平の見方が、主観に基づく希望的観測の域を出るものではなかったことが、明らかとなったといえよう。

おわりに

本章で述べたように、鄧小平は「第二回歴史決議」における毛沢東評価が将来的に修正される可能性を容認していた。鄧は文革再評価に関しては直接触れなかったものの、文革を巡る問題がその性格上、毛への再評価と不可分の関係にある事を考えれば、この問題に関する鄧の発言は事実上、同決議以降の文革評価への再修正をも容認するものであったといえる。その根底には、中国社会での同決議の受容と定着を巡る鄧の自信が存在していた。端的に言

えば、鄧は自身が主導した同決議が、毛沢東と文革に関する公式見解として社会的に受容されているのみならず、それが将来的に否定される可能性はないとの確信を持っていたといえる。鄧が将来的な毛沢東への全面的再評価、そして事実上、同決議における文革評価への見直しを容認した時、そこにはその継承を前提とする発想が存在していたとみてよい。換言すれば、鄧小平は同決議自体が議論の対象となる可能性は想定していなかったといえる。

その点から言えば、21世紀に入ってから活発化した「反第二回歴史決議系新左派」による文革再評価論の展開とその論理は、鄧の上述の想定を超えたものであったといえよう。特に、本章で取り上げた李慎明らの言説は「第二回歴史決議」への疑義に留まらず、同決議が「十年の内乱」と位置付けた文革を、中国共産党と中国社会の発展に不可欠な出来事として高く評価する点において、同決議以降の文革評価と完全に異なるものであった。加えて、それらが俞正声らに象徴される文革経験者によってなされ、かつ彼らが文革に伴う人的、社会的損失を中国と中国人、中国共産党にとっての「学費」あるいは「財産」として肯定する時、文革経験者は自らの経験ゆえに文革に否定的立場をとる、という、ある種「性善説」的前提に基づくイメージは再検討を迫られざるを得なくなる。

また、「反第二回歴史決議系新左派」が文革への是非を「中国人」としての「尺度」と位置付ける時、彼等は文革に対する批判を拒絶し、文革と「反省」という概念を結びつけることを回避するのみならず、文革への批判を批判者における「中国人」としての道德観、倫理観の欠如と同一視したといつてよい。いわば、彼らにとって文革への是非を巡る問題はこの時点で、文革を評価する個々人の「中国人」としての資質を問うリトマス試験紙としての性格をも、帯びることとなる。換言すれば、「反第二回歴史決議系新左派」にとって、文革に

対する認識の在り方とは「中国人」としての「愛国心」の所在を図る指標に他ならない。ここに、文革と「愛国心」が融合するに至るのである。

「反第二回歴史決議系新左派」による文革再評価論はここに、政治・社会現象としての文革への評価という次元を超えた性格を帯びることとなったといえよう。そして、21 世紀の中国における文革評価は『簡史』と「第三回歴史決議」において示されたように、「第二回歴史決議」と「反第二回歴史決議系新左派」的な文革再評価の論理との間での「揺らぎ」という現実直面しているのである。

注

はじめに

- (1) 王芋雲「広場舞 為何被汚名化：“文革”一代の大媽向何処去？」、『澎湃新聞』、2015年4月7日、<https://www.thepaper.cn?newsDetail...> (2021年12月21日最終確認)。
王曉鈴「忠字舞到広場舞：大媽的文革記憶」、『中時新聞網』、2018年8月25日、<https://www.chinatimes.com/newspaper/10180825....> (2021年12月21日最終確認)
- (2) 「広西防疫惊見“文革式”游街示衆 律師：公安違法」、『自由亞州電台(rfa)』、2021年12月30日、<https://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao....> (2022年2月8日最終確認)。
松仁「文革陰魂不散、広西街頭惊現防疫違規遭游街示衆者」、『美国之音中文網(voachinese)』、2021年12月30日、<https://www.voachinese.com/a/suspects-paraded-through-Chinese-streets...> (2022年2月8日最終確認)。
- (3) 林培瑞 (Perry, Link) 「意識不到的文革遺産」、宋永毅主編『文革五十年：毛沢東遺産和当代中国 (上)』、明鏡出版社 (ニューヨーク)、2016年、p. 9。

第一章

- (1) 拙稿「「極左派」紅衛兵における造反理念の形成と奪権闘争の展開－広東省での事例から」『現代中国』第75号、日本現代中国学会、2001年。
- (2) たとえば、王紹光 [1993]、宋永毅 [1997] には、湖北省の「極左派」組織である

「北斗星学会」「プロレタリア文化大革命を最後まで推し進めることを決心するプロレタリア革命派連絡ステーション（決派）」とその機関紙である「揚子江評論」（略称は「武漢“北、決、揚”」）に関する論考がある。王紹光『理性與瘋狂：文化大革命中的群眾』牛津大学出版社（香港），1993年。「決派」については、宋永毅・孫大進『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋（香港），1997年も参照。徐友漁『形形色色的造反：紅衛兵精神素質的形成及演變』中文大学出版社（香港）、1999年は、紅衛兵世代における精神形成の過程、各地の地域的特質が紅衛兵運動に及ぼした影響を考察している。

- (3) 加々美光行『逆説としての中国革命〈反近代〉精神の敗北』田畑書店，1985年。Hong Yung, Lee. *THE RADICAL STUDENT IN KWANGTUNG DURING THE CULTURAL REVOLUTION: The China Quarterly, No. 64, Dec, 1975.*
- (4) 拙稿「広東省における文化大革命と「地方主義」」『中国21』Vol, 10, 愛知大学現代中国学会、2001年3月。
- (5) 許正元 [1988] によれば、広東では1968年2月から12月末までの間に「反共」「反毛人士」による活動が35件発生した（労働改造場での脱走、暴動事件は除く）。そのうち「極左」派関連と考えられるものは10件である。許正元編「文革大事記（十四）：一九六八年元月一日二月二十日」『共党問題研究』第十五卷第三期，共党問題研究中心（台北），中華民國77年（以下掲載誌，出版社，出版年同じ），同上（十六）：一九六八年四月二十一日—六月三十日」前掲誌第十五卷第四期，同（十七）：一九六八年七月一日—八月三十一日」前掲誌第十五卷第六期，同（十八）：一九六八年九月一日—十月三十一日」，前掲誌第十五卷第七期。

- (6) 本章で用いる紅衛兵関係資料の典拠は以下のとおり。(a) *Red Guard Publications* (紅衛兵資料) : Reprinted by Center for Chinese Research Materials Association of Research Libraries: Washington, D.C, 1975 所収の紅衛兵資料。引用時に (R) を付す。
- (b) 丁望編『中共文化大革命資料彙編』第六卷「中南地区文化大革命運動」明報出版社(香港)、1972 年。引用時に (丁) を付す。
- (7) 「広州一・二二奪権」の展開に関する記述は、以下を参考とした。加々美光行『歴史のなかの中国文化大革命』岩波現代文庫、2001 年。陳東林等主編、加々美光行監修、徳澄雅彦監訳、西紀明等翻訳『中国文化大革命事典』中国書店、1997 年。Vogel, Ezra. *F.Canton under Communism: Programs and Poitics in a Provincial Capital, 1949-1968*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1969. 曾志『一個革命的幸存者：曾志回憶実録(下)』広東人民出版社(広州)、1999 年。徐友漁『形形色色的造反：紅衛兵精神素質的形成及演變』中文大学出版社(香港)、1999 年。磯部靖「広東における文化大革命の展開と地方主義」、国分良成編著『中国文化大革命再論』慶應義塾大学出版会、2003 年、。
- (8) 前掲(7)、加々美、pp. 119-121。
- (9) 「趙紫陽、区夢覚、林李明、尹林平談《省革聯》」中南林学院《紅色造反者》『紅色暴動』第二期、1967 年 2 月 27 日 (R)。
- (10) 趙・林らと尹林平ら「地方主義者」との確執を巡っては、前掲(4)拙稿。尹に関しては黄慰慈、黄建新、陳思豪の研究があるが、1949 年以降の活動に関する記述は極めて少ない。黄慰慈、黄建新、陳思豪「尹林平」中共広東省委党史資料征集委員会中共広

東省委党史研究委員会編『広東党史資料』第十五輯、広東人民出版社（広州）1989年。

(11) 「対目前広州地区無産階級文化大革命形成的一些看法」、「十間広東省革命造反聯合

委員会」、広州大專院校紅衛兵革命造反總司令部編『広州紅衛兵』1967年2月10日(R)。

(12) 「広州三司」に属するこの組織は、「一・二二奪権」が密室で決められた奪権であ

るとの批判も行い、「旗」派主導の奪権に対する不信感を露わにしている。前掲「十間

広東省革命造反聯合委員会」(R)。

(13) 本報評論員「評中共広東省委《告全省党员、幹部、人民書》」前掲『広州紅衛兵』、

1967年2月10日(R)。

(14) 「一・二二奪権」を巡る「旗」派のこのような行動は、奪権以降少なくとも一年間、

他勢力による批判対象とされ続けた。加えて、中央指導者が相次いで「旗」派の行動を

批判したことは、反「旗」派勢力を勢いづけた。例えば、周恩来は1967年11月9日、

北京を訪れた広州の造反派代表団と接見した際、「旗」派の行動に関して、「(一・二二

奪権)は参加者は多くなく、広範囲ではなく、連合が無かったので、奪権は讓権に変

わり、権力も掌握しきれなかった」と批判した。「中央首長談“奪権”与“大方向”」『激揚

文字』、一九六八年第一期(R)。各地での奪権運動を巡る周恩来の動きについては、安

建設編『周恩来的最後歲月（一九六六—一九七六）』中央文献出版社（北京）、1995年。

陳揚勇『苦撐危局：周恩来在一九六七』中央文献出版社（北京）、1999年。吳慶彤『周

恩来在“文化大革命”中：回憶周總理同林彪、江青兩個反革命集团的關爭（增訂本）』

中共党史出版社（北京）、2002年など。

(15) 本報評論員「到中流擊水，浪遏飛舟—形成和任務」広東省直屬機關革命造反聯絡

站（省直站）《一月風暴》編輯部編『一月風暴』、1968年1月（R）。

(16) 例えば、前掲(14)で挙げた周恩來の「讓權」批判はその典型と言えるであろう。

(17) 王から中央文革小組の「極左派」指導者の動向に関しては、王力『現場歴史：文化大

革命紀事』牛津大学出版社（香港）、1993年、穆欣『劫後長憶：十年動亂紀事』新天

出版社（香港）、1997年など、中央文革小組の元成員による回想録に詳しい。

(18) 中共中央「中共中央通知 中發（67）313号」1967年10月7日、中共中央弁公庁秘書

局「毛主席視察華北，中南和華東地区時的重要指示」1967年10月9日發出、CCP

Document of the Great Proletarian Cultural Revolution, 1966-67（『中共中央重要

文件彙編（關於文化大革命）一九六六—六七』）。Kowloon, Hong Kong: Union Research

Institute 1968, p.545-549。

(19) 「批陶連委」の活動を巡っては、前掲(1)拙稿。

(20) 文亦武「三月東風浩蕩—兼与《中大紅旗》談心」紅総建司〈刺刀見紅〉編輯『工人評

論』第四期、1968年3月中旬（R）。

(21) 「搗毀原中南局黒地下司令部」『直搗中南』（搗毀原中南局司令部專刊之一），1968

年7月（R）。

(22) 馮桑・雲光英・摩似光「徹底清算没有陶鑄的陶鑄反動路線」広州外国語学院《三・

三・三》造反兵团主弁『三三三戰報』第五期，1967年6月28日（R）。

(23) 「呉有恒罪行録」、工革聯《拳紅旗》、省直紅旗、市機關紅旗、広州鋼三司、《揪黒

手》聯合兵团編『戰省委』專刊第一号、1968年1月28日（R）。

(24) 「論軍權」広州紅司中南林学院《紅色造反者》主編『紅色暴動』、1967年8月1日（R）。

- 本報編集部「黄永勝之流向何処去?」『紅色暴動』1967年8月5日(R)。
- (25)「黒手們的黒話(三)」『三軍聯委戦報』第十号、1968年8月7日(R)。
- (26)「革幹連」に関しては、前掲(1)拙稿。
- (27) 中共広州軍区「關於在広州地区支左工作中所犯錯誤的檢查」、1967年8月20日、「中共研究」雑誌社『中共文化大革命重要文件彙編』(台北)、中華民國62年。
- (28)「周總理接見広州旗派代表五位同志的講話」(1967年10月19日)、「周總理接見広州旗派代表的講話」(1967年11月3日)、(丁)。
- (29) 中井中央「關於広東問題的決定」、1967年11月12日。「中共研究」雑誌社『中共文化大革命重要文件彙編』(台北)、中華民國62年。
- (30)「十大分歧—対当前広州改良主義的批判」、広州鋼紅聯921縦隊、広鉛122戦団、紅司吶喊227、美院1126戦団『文革評論』、1968年1月(R)。
- (31) 前掲(4)拙稿。
- (32)「広州無産階級革命派各組織負責人形勢座談合紀要」本報記者組「看!右傾翻案在広東各地」、広州紅代会鋼三司《戦広東》編級部「戦広東」1968年7月10日(R)。
- (33) 社論「芙蓉国裡尽朝暉」『人民日報』、1968年4月10日。
- (34) 中大革命造反委員会「衛二紅」戦団「反革命小臭蟲武伝斌罪行録」、原載『中大戦報』、1968年8月4日(丁)。
- (35) 同上。
- (36) 革委会が開催した武伝斌批判闘争会議では彼と王力らとの関係に加え、「反共救国総団」なる組織との関係が追及されている。この事実は、革委会側が王力らとの関係

のみでは、武を批判する材料として不十分と考えていたことを示唆している。「省革委会 召開會議鬭爭小臭蟲武伝斌」(丁)。

(37) 江湖「新的激戰」、広州紅代会 紅司 暨大東方紅 327 兵团 315 兵团合編『東方紅』
第一号(総 27 期)、1968 年 6 月上旬。

(38) 社論「奪取第五回合的全面勝利」、広州暨南大学革命聯合委員会《暨大革聯》(判決
不能)、『暨大革聯』(日時判読困難) 紅司 暨大東方紅《327》「第五回合」、前掲
(37)『東方紅』(R)。

第 2 章

(1) 毛沢東「五・七指示」、1966 年 5 月 7 日、邦訳は東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東
思想万歳(下)』、三一書房、1975 年、pp. 335-337。「中国共産党中央委員会のプロレタリア
文化大革命についての決定」、1966 年 8 月 8 日、邦訳は東方書店出版部編『中国プロレタ
リア文化大革命資料集成』東方書店、1970 年、第一巻、p. 105。

(2) 「在毛沢東思想大路上前進」、『紅旗』、1967 年第 13 期。

(3) 宋永毅・孫大進『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋(香港)、1997 年、p. 269。村田
雄二郎「アナーキズム」、天児慧等編『岩波現代中国事典』岩波書店、1999 年、p. 8。
印紅標「紅衛兵狂飆—全景大素描—」、于輝編『共和国風雲叢書 紅衛兵秘録』團結出版
社(北京)、1993 年、p. 308。

(4) 錢理群『毛沢東時代和後毛沢東時代：另一種歷史書写(下)』聯經出版事業股份公司(台
北)、2012 年、p. 10。

(5) 前掲(1)。

(6) 同上。

(7) 陳煥仁『紅衛兵日記』中文大学出版社（香港）、2006 年、pp. 78, 79。大学での文化革命委

員会の選出を巡っては陳のほかに、孫月才『文革十年日記』中文大学出版社（香港）、

2012 年、p. 77。

(8) 同上、p. 82。

(9) 「在毛沢東思想大路上前進」、『紅旗』1966 年第 13 期。

(10) 「把無産階級文化大革命進行到底」、『人民日報』『紅旗』1967 年元旦共同社説。邦訳は

東方書店出版部編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』東方書店、1971 年、第二

巻、p. 213。『紅旗』評論員「無産階級革命派連合起来」、『紅旗』1967 年第 2 期。邦訳

は同上、p. 293。

(11) 「上海の文化大革命に対する指示」、1967 年 2 月 12 日、『毛沢東思想万歳（下）』p. 378。

(12) 「プロレタリア革命派の奪権闘争について」、『紅旗』1967 年第 3 号、邦訳は前掲(11)、

p. 328。

(13) 省無聯一中紅造会鋼三一九兵団《奪軍権》一兵「中国向何処去?」、1968 年 1 月 6 日、

原載は『広印紅旗』、1968 年 3 月。宋永毅・孫大進、前掲書、p. 279。邦訳はエクトゥー

ル・マンダレ、山下佑一訳『毛沢東を批判した紅衛兵：紅衛兵通信集』日中出版、1976

年。「《奪軍権》一兵」は楊曦光のペンネーム。

(14) 同上。

(15) 同上。

(16)本章での湖北省における「反復旧運動」に至るまでの経緯については、注を別途付さな

いものは、王紹光『理性與瘋狂：文化大革命中的群眾』牛津大学出版社（香港）、1993年に拠った。

(17)内部文件「劉豐同志在湖北省革命委员会扩大会議上關於“北斗星学会”“決派”及《揚子江

評論》問題的講話（根拠記錄整理、未經本人審閱）」、1969年10月3日、筆者所蔵資料

（以下、湖北省革命委员会内部文件）。なお、魯礼安は後年出版した回想録のなかで、

曾思玉が1968年12月に招集された湖北省革命委员会の常務委員会において、「北斗星

学会」を名指して批判したと述べている。魯は1968年5月に逮捕されたが、その後、

魯を尋問した軍人の取調官はある取調べの際、「劉豐同志の最近の省革命委员会扩大会

議での北、決、揚問題に関する重要講話」と題する書類を、魯に提示したという。魯に

よれば、その表紙には「録音に基づいて整理。本人の審査は経ていない」との注意書き

が書かれていた。筆者所蔵の資料は、これと同一のものと推測される。魯礼安、王紹光

『仰天長嘯：一個单監十一年的紅衛兵獄中籲天録』中文大学出版社（香港）、2005年、

pp. 431-435。

(18)同上資料。

(19)前掲「中国向何处去？」。

(20)同上。

(21)張玉鋼「我們的綱領」、原載は『広印紅旗』、1968年3月。宋永毅・孫大進、前掲書、

pp. 300, 301。

(22)「怎樣認識無産階級政治革命（摘要）」、原載は『揚子江評論』第10期、1968年6月12

日。宋永毅・孫大進、前掲書、p. 353。

(23) 前掲(1)「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」。

(24) 「中国向何处去？」

(25) 同上。

(26) 同上。

(27) 武漢地区決派聯絡站「決派宣言（第二稿草稿）（摘要）」、1968 年 1 月 25 日、宋永毅・

孫大進、前掲書、p. 356。

(28) 「中国向何处去？」。

(29) 「決派宣言（第二稿草稿）（摘要）」。

(30) 同上。

(31) 「怎樣認識無產階級政治革命」。

(32) 「中国向何处去？」。

(32) 「怎樣認識無產階級政治革命」。

(34) 毛沢東「八期六中全会での講話」、1958 年 12 月 19 日、『毛沢東思想万歳（上）』、

pp. 1131, 132。

(35) 「中共中央、中央文革「關於對徵詢召開『九大』的意見的通報」、1967 年 11 月 27 日、

「中共研究」雜誌社編集部『中共文化大革命重要文件彙編』、「中共研究」雜誌社（台北）、

中華民國 62 年、p. 11。

(36) 「中国向何处去？」。

(37) 同上。

(38) 「怎樣認識無產階級政治革命（摘要）」。

(39) 同上。

(40) 「中国向何处去？」。

(41) 同上。

(42) 「怎樣認識無產階級政治革命（摘要）」。

(43) 「決派宣言（第二稿草稿）（摘要）」。

(44) 王紹光、前掲書、p. 235。

(45) 前掲(17)。

第3章

(1) 宋永毅・孫大進『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋（香港）、1997年、p. 269。

(2) 徐友漁「異端思潮和紅衛兵的思想轉向」、劉青峰編『文化大革命：史実与研究』中文大学出版社（香港）、1996年、p. 268。

(3) 宋永毅「從毛沢東的擁護者到他的反对派—中国文化大革命中年轻一代覺醒的心靈旅程的本質与毛沢東的集權思想」『当代中国研究』、<https://www.chinavj.net/StubArticle.asp?issue=050409&total=91>（2006年7月1日確認）。

(4) 印紅標「從「新思潮」到「新階級」—文革中青年的社会批判思潮」、宋永毅主編『文化大革命：歷史真相和集体記憶（上）』田園書屋（香港）、2007年所収。

(5) 魯礼安・王紹光校『仰天長嘯：一個单監十一年的紅衛兵獄中籲天録』中文大学出版社（香港）、2005年は、湖北省の「極左派」紅衛兵組織「北斗星学会」、「プロレタリア文

化大革命を最後まで推し進めることを決心するプロレタリア革命派連絡ステーション（決派）」とその機関紙「揚子江評論」（略称「北、決、揚」）の元指導者であった魯礼安の回想録である。陳煥仁著『紅衛兵日記』中文大学出版社（香港）、2006 年、宋伯林・余汝信編注『紅衛兵興衰録：清華附中老紅衛兵手記』德賽出版（香港）、2006 年は それぞれ、文発動時に北京大学哲学科と清華大学附属中学に在籍し紅衛兵として活動した著者の日記である。労働者造反派組織指導者の回想録としては、陳益南『青春無痕：一個造反派工人的十年文革』中文大学出版社（香港）、2006 年。

(6) 余習広主編『位卑未敢忘憂國：文化大革命上書集』泰徳時代出版（香港）、2006 年。

(7) 例えば、宋永毅，前掲(3)。楊国斌「紅衛兵一代的認同轉變」，宋永毅主編，前掲(3)所収。

駱小海『紅衛兵興衰録』序，宋伯林，前掲書，pp. 14-32。華新民「我所知道的北 京 “新思潮”」『華夏文摘』2004 年、<http://www.cnd.org/CR/ZK04/cr227.hz8.html>（2006 年 6 月 14 日確認）。

(8) 肖冬連等『求索中国—文革前十年史』紅旗出版社（北京）、1999 年、下巻、pp. 1094 -1096。

(9) 肖冬連，同上，p. 1094。

(10) 毛沢東「成都会議での講話」1958 年 3 月、東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想 万歳(上)』三一書房，1974 年、pp. 221-222。

(11) 肖冬連等，前掲(8)，p. 1094。

(12) 「中国共産党第八期中央委員会十一回総会の公報」、1966 年 8 月 12 日。邦訳は東方書店出版部編集『中国プロレタリア文化大革命資料集成』東方書店、1971 年、第二巻所収。

(13) 陳煥仁，前掲書，p328。

(14) 宋永毅，前掲(3)，印紅標，前掲(3)。

(15) 魏光奇，丁東采「没有空白—文革時期的讀書生活」『人民網』“人民書城”HP，

<http://www.booker.com.cn/big5paper17/1/class00170004/hwz5428.htm> (2006年5月

7日確認)。

(16) 宋伯林，前掲(5)、p. 258, 307。

(17) 駱小海，前掲(7)。

(18) 華新民，前掲(7)。

(19) 駱小海，華新民，前掲(7)。紅衛兵に対するミロヴァン・ジラスの影響に関しては、宋

永毅、印紅標、前掲(3)、陳奎德「中国自由主義在文革中的萌芽」、同上所収。

(20) 王申酉（1946—1977）は文革発動時、華東師範大学物理系学生。1968年に逮捕、1977

年に処刑。王申酉の経歴等に関しては、王友琴『文革受難者：關於迫害、監禁与殺戮

的尋訪実録』開放出版社（香港）、2004年。P. 408。丁東「紀念王申酉」『觀察

(Observechina)』 <http://www.observechina.net/info/artshow.asp?ID=39215> (2007年

3月10日確認)。劉曉波「向自由的先驅王申酉致敬」、同上、

http://www.observechina.net/magazine/art_show.asp?ID=25289 (2007年3月10日確

認)。余杰「王申酉：死於毛沢東的思想者」、<http://www.observechina.net/info/>

[artshow.asp?ID=36141](http://www.observechina.net/info/artshow.asp?ID=36141) (2007年3月10日確認)、金鳳「十年生死祭—紀念王申酉」、

同上、https://www.observechina.net/magazine/art_show.asp?ID=17179 (2007年7月

27日確認)。

- (21) レーニン『国家と革命』初版 1917 年、宇高基輔訳、岩波文庫版、2000 年、p. 153。
- (22) 毛沢東「北戴河会議での講話」（1958 年 8 月 21 日）、ロデリック・マックファーカー等編。徳田教之他訳『毛沢東の秘められた講話（下）』岩波書店、1992 年、p. 118。
- (23) 毛沢東、同上、p. 114。
- (24) 劉曉波、丁東、前掲(20)。
- (25) 余習広、前掲書、pp. 112-113。
- (26) 余習広「“拯救祖国”」、余習広、前掲書、pp. 71-97。
- (27) 蕭瑞怡「熱血写春秋一回憶上書毛沢東」、余習広、前掲書、pp. 22-34。
- (28) 華新民、前掲(7)。
- (29) 「論新思潮—四三派宣言」、宋永毅・孫大進、前掲(1)所収。
- (30) 宋永毅・孫大進、同上、p. 245。
- (31) 「論新思潮—四三派宣言」。
- (32) 劉国凱『広州紅旗派の興亡』博大出版社（香港）、2006 年、pp. 158-160。
- (33) 楊曦光『牛鬼蛇神録：文革囚禁中の精霊』牛津大学出版社（香港）、1994 年、p. 5
- (34) 毛沢東「対陳正人關於社教蹲点情況報告の批語和批注」（1964 年 12 月 12 日、1965 年 1 月 15 日）、『建国以来毛沢東文稿 第十一冊（1964 年 1 月—1965 年 12 月）』中央文献出版社(北京)、1996 年、pp. 265-266。
- (35) 省無聯一中紅造会鋼三一九兵団《奪軍権》一兵「中国向何処去?」、原載広州《広印紅旗》1968 年 3 月、宋永毅・孫大進、前掲書所収。
- (36) レーニン、前掲(21)、p. 42。

(37) 「中国向何处去？」。

(38) マルクス『ゴータ綱領批判』初版 1875 年、望月清司訳、岩波文庫版、1999 年、pp. 55, 56。

(39) 「中国向何处去？」。

(40) 「怎樣認識無產階級政治革命（摘要）」、原載《揚子江評論》1968 年 6 月 12 日、宋永毅・孫大進、前掲(1)、pp. 353, 354。

(41) 宋永毅・孫大進、同上、p. 269。

(42) レーニン、前掲(21)、p. 42。「決派」とその関係者は湖北省革命委員会の成立(1968 年 2 月)に伴い、「革命党」の主導により革命委員会の解体と「北京人民公社」の実現を目指すという方針を転換させ、「革命的群衆」による革命委員会への指導、監督という路線を打ち出した。彼らは「反復旧」を掲げ、革命委員会との衝突を繰り返したが、これにより、「決派」の「極左」的性格には、革命委員会の存在自体を否定する「省無聯」的なそれとの相違が生じることとなった。しかし、「決派」のこのような路線は湖北省革命委員会指導部により「党の一元的指導を破壊するアナルコ＝サンジカリズム」として非難された。いわば、「決派」の「極左」性は湖北省革命委員会そしておそらくは中央文革小組により、「省無聯」的「極左」とは異なる「危険性」を有するものと見なされることとなったのである。湖北省での文革および「決派」、「北斗星学会」、「揚子江評論」関係者の活動については、宋永毅・孫大進、前掲(1)、pp. 335-342。王紹光『理性與瘋狂：文化大革命中的群衆』牛津大学出版社（香港）、1993 年。魯礼安、王紹光『仰天長嘯：一個單監十一年紅衛兵籲天錄』『超凡領袖的挫敗：文化大革命在武漢』

中文大学出版社（香港）、2009 年。湖北省革命委員会内部文件「劉豊同志在湖北省革命委員会拡大会議上關於“北斗星学会”“決派”及『揚子江評論』的講話」、1969 年 10 月 3 日、筆者所蔵資料。拙稿「中国文化大革命期における紅衛兵の「極左思潮」について：革命委員会の成立を巡る動きを中心に」『アジア経済』Vol. 46 No9 アジア経済研究所、2005 年 9 月。

(43) レーニン、前掲(21)、pp. 142-143, 163。

(44) 毛沢東、前掲(22)。

(45) 毛沢東「省・市党委員会の書記会議における発言」（1957 年 1 月）、前掲(10)、p. 114。

(46) レーニン、前掲(21)、p. 131。

(47) 「中国向何处去?」, 「怎樣認識無産階級政治革命（摘要）」。

(48) 「論新思潮—四三派宣言」。

(49) 「中国向何处去?」。

(50) 蕭瑞怡「上毛沢東万言書」、1968 年 5、6 月、余習広、前掲(6)。

(51) 傅世安「致毛沢東同志的万言書」一九六六年七月一五日毛沢東宛添付文書「論“文化大革命”中的革命」1966 年 7 月 3 日、余習広、同上所収。

(52) 胡全林「關於林彪“頂峰論”問題上毛沢東書」、1966 年 11 月、余習広、同上所収。

(53) 「論“文化革命”中的革命」。

(54) 「上毛沢東万言書」。

(55) 同上。

(56) マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登、田中吉六訳、岩波文庫版、2000 年、

pp. 91, 92。 (57)同上、p. 99。

(58)「論“文化大革命”中的革命」。

(59)「上毛沢東万言書」。

第4章

(1)徐友漁『形形色色的造反：紅衛兵精神素質的形成及演變』中文大学出版社(香港)、1999年。米鶴都『聚焦紅衛兵』三聯書店(香港)有限公司、2005年。宋永毅「從毛沢東的擁護者到他的反對派—中國文化大革命中年輕一代覺醒的心靈旅程—」、宋永毅主編『文化大革命：歷史真相和集體記憶(上)』田園書屋(香港)、2007年、pp. 363-383。陳奎德「中國自由主義在文革中的萌芽」、宋永毅主編、同上、pp. 428-437。印紅標『失蹤者的足跡：文化大革命期間的青年思潮』中文大学出版社(香港)、2009年。

(2)蕭瀟「文化革命中的地下讀書運動」『華夏文摘 文革博物館專集(二八)』、第136期、1997年10月、<http://museums.cnd.org/CR/ZK97/zk136.hz8.html> (2013年4月24日最終確認)。

(3)葛岩「七十年代：記憶中的西安地下讀書活動」『華夏文摘 文革博物館通訊(557)』第725期、2009年11月、<http://museums.cnd.org/CR/ZK09/cr557.gb.html> (2013年4月24日最終確認)。

(4)米鶴都、前掲書、p. 165。

(5)徐友漁、前掲書、p. 50。

(6)吉越弘泰『威風と頽唐 中國文化大革命の政治言語』太田出版、2005年、p. 574。

- (7) 拙稿「文化大革命初期の民間言説に見る「社会主義」認識－紅衛兵と上書者の言説の比較において」『中国研究月報』第 62 卷第 4 号、中国研究所、2008 年、p. 15。拙稿「中華人民共和国建国を巡るカトリック教会・ローマ教皇庁の動向－カトリック教会・ローマ教皇庁の視点からの分析」『中国 21』Vol.32, 愛知大学現代中国学会編、東方書店、2009 年、p. 215。
- (8) 拙稿「中国現代史のなかのカトリック教会」『カトリック研究所論集』第 16 号、仙台白百合女子大学カトリック研究所、2012 年 3 月、p. 101, pp. 119-125。
- (9) 徐友漁、前掲(1)、p. 49。
- (10) 同上、p. 217。
- (11) 蕭瀟、前掲(2)。
- (12) 宋永毅、前掲書、p. 371。
- (13) 印紅標、前掲書、p. 227。
- (14) 蕭瀟、前掲(2)。
- (15) Roderick, Macfaquhar, *THE ORIGINS OF THE CULTURAL REVOLUTION 3. The Coming of the Cataclysm, 1961-1966*. New York. Columbia University Press, 1997. p. 361.
- (16) 牟志京「似水流年」、北島、曹一凡、維一主編『暴風雨的記憶：1965-1970 年の北京四中』牛津大学出版社(香港)、2011 年、p. 41。
- (17) 蕭瀟、前掲論文。
- (18) 宋伯林、余汝信編注『紅衛兵興衰錄：清華附中老紅衛兵手記』德賽出版有限公司(香港)、

2006 年。

- (19) 秦曉「走出烏托邦」、《北京伝奇》策画、米鶴都主編『回憶與反思：紅衛兵時代風雲人物——口述歷史之一』中国書局有限公司(香港)、2011 年 3 月、p. 122。以下、米鶴都主編(一)。

- (20) 劉文忠『反文革第一人及其同案犯』崇適文化出版(澳門)、2008 年、p. 22。

- (21) 沈福祥『崢嶸歲月：首部工人造反派回憶錄』時代國際出版有限公司(香港)、2010 年、p. 45, 89。

- (22) 徐友漁、前掲書、p. 50。

- (23) 同上。

- (24) 徐友漁、前掲書、p. 49。

- (25) 滕叙亮『開国元勳の子女們——哈軍工高幹子女伝記』広東人民出版社(広州)、2010 年、pp. 249, 250。

- (26) 葉維麗「一生在思考」、米鶴都主編『回憶與反思：紅衛兵時代風雲人物——口述歷史之二』中国書局有限公司(香港)、2011 年 3 月、p. 149。以下、米鶴都主編(二)。ユン・チアン、土屋京子訳『ワイルド・スワン(上)』講談社、1993 年、p. 339。

同時期に中国国内で刊行された児童向け書籍に関しては、中国共産党八期十中全会(1962 年)における「継続革命論」の提起等を反映し、階級闘争的觀念や「革命後継者」の理想像を描く作品が主流を占め始めた。その反面、純粹に児童向けと判断し得る作品も存在していた。例えば、『《児童文学》二十年優秀作品選：一九六三—一九八三』には、八期十中全会後の 1963 年から 1964 年にかけて発表された児童向け小説や詩などが十一

編、収められている。うち七編は八期十中全会後の方向性を反映した内容となっているが、それ以外の四編、具体的には金近「狐が狩人を撃つ話し（狐狸打猎人的故事）」（1963年9月第1期掲載）、葛翠琳「金花路」（1963年12月第2期掲載）、魯克「尻尾を無くしたのは誰？（誰丢了尾巴？）」（1964年5月第4期掲載）、于之「四不象が本領を学ぶ（小麋鹿学本領）」（同上）に関しては、この種の要素が含まれていないと考えられる。金近、魯克、于之の作品はそれぞれ動物を主人公としており、かつ階級闘争的観念や理想の「革命後継者」像の強調を一切含んでいない点において、他国の児童向け作品と共通する傾向を持っていると判断できる。葛翠琳の作品は、皇帝が自身の宮殿を建てさせる事を目的として有能な大工職人に出頭を命じたのに対し、職人がそれを拒み自害したものの、彼が山奥に密かに建てた建物は後世に伝えられた、という結末になっている。この内容からは、権力者の横暴に対する批判という方向性を読み取ることも可能であろう。反面、この種のストーリーが世界の民話に比較的多く見られるものである点を考えれば、この作品の性格を当時の政治状況との関連性においてのみ解釈する事は、必ずしも妥当ではないように思われる。《児童文学》編集部編『《児童文学》二十年優秀作品選：一九六三—一九八三』中国少年兒童出版社（北京）、1983年。

(27) ユン・チアン、同上。

(28) 葉維麗、前掲(26)。

(29) 周明主編、劉茵、姜強国編選『歴史在这里沈思』北岳文芸出版社（大原）、1989年、p. 301。

(30) 趙京興「我的閱讀與思考」、北島等主編、前掲書、pp. 285, 286。

(31) 喬海燕「文革時的“焚書”記憶」『華夏文摘 文革博物館通訊(680)』第848期、2012年

5 月、<http://museums.cnd.org/CR/ZK12/cr680.gb.html> (2013 年 4 月 25 日最終確認)。

(32) 安文江「我不懺悔」『千秋功罪』四川人民出版社(成都)、1994 年、p. 280。徐友漁、前掲書、pp. 49, 50。

(33) 高級幹部の子弟、子女に関しては「高幹子弟」「高幹子女」という二つの表現が存在すが、本書ではより一般的と思われる前者を用いることとする。

(34) 李大同「草原帰去来」、米鶴都主編 (二)、p. 247。

(35) 秦曉、米鶴都主編 (一)、p. 95。譚斌「往事莫驚猜」、同上、p. 289。

(36) 劉龍江「我篤信中庸之道」、米鶴都主編 (二)、p. 95。

(37) 陳凱歌、刈間文俊訳『私の紅衛兵時代』講談社、1990 年、p. 47。

(38) 周孜仁『一個紅衛兵小報主編的文革記憶』新銳文創(台北)、2012 年、p. 74。

(39) 印紅標、前掲書、p. 229。

(40) 印紅標、同上、p. 239。秦曉、米鶴都主編 (一)、p. 122。

(41) 陳凱歌、前掲書、pp. 60-64。

(42) 伊林、滌西「草根政治——條至死不渝的道路」、米鶴都主編 (一)、p. 251。

(43) 徐友漁、前掲書、p. 50。

(44) 伊林、滌西、前掲(42)、p. 246。

(45) 劉龍江、米鶴都主編 (二)、p. 95。

(46) 秦曉、米鶴都主編 (一)、p. 97。

(47) 葛岩、前掲(3)論文。

(48) J・D・サリンジャー、野崎孝訳『ライ麦畑でつかまえて』白水社、2012 年。

(49) 安文江、徐友漁、前掲(32)。

第5章

- (1) 東方「《炎黄春秋》文革文章被腰折 人民日報夜評文革」、『美国之音中文網』(以下 VOA)、2016 年 5 月 17 日、<http://www.voachinese.com/articleprintview/3334002.html>
- (2) 周西「前中央文革小組成員戚本禹昨日在上海舉殯」、『法国国际廣播電台 (Radio France International/rfi 華語) 』(以下、rfi 華語)、2016 年 4 月 25 日、<http://cn.rfi.fr/%E4%B8%....> 古莉「中国内地唯一文革記念館被封」、rfi 華語、2016 年 5 月 5 日、<http://cn.rfi.fr/%E4%B8%....> 甄樹基「大連徒步会出现“大海航行靠舵手”旗幟疑為文革招魂」、rfi 華語、2016 年 5 月 15 日、<http://cn.rfi.fr/%E4....> 古莉「文革 50 周年 毛夫人江青墓前擺滿鮮花」、rfi 華語、2016 年 5 月 16 日。<http://cn.rfi.fr/%E4%B8%...> 海彦「陝西举行紀念文革座談会引起關注」、VOA 中文、2016 年 5 月、<http://www.voachinese.com/articleprintview/3323221.html>
- (3) 社評「“文革”結束 40 年与 50 年刍議」、『環球網』、2016 年 1 月 25 日、<http://opinion.huanqiu.com/editorial/2016-01/843822.html>
- (4) 「環球時報社評：“文革”錯誤發動 50 周年 反思不應偏激」、『中国網』、2016 年 3 月 30 日。http://news.china.com.cn/2016-03/30/content_38138583.htm
- (5) 单仁平「“文革”已被徹底否定」、『環球網』、2016 年 5 月 17 日。「单仁平」は胡錫進(『環球時報』編集長)のペンネーム。<http://opinion.huanqiu.com/shanrenping/2016-05/8937>

703.html

- (6)「以史為鑑是為了更好前進」、『人民網』2016年5月17日。<http://opinion.people.com.cn/n1/2016/0517/c1003-28355143.html>
- (7)張煒「點評中國：中國人需要認真反思文革」、『BBC 中文網』（以下 BBC 中文）、2016年5月16日。http://www.bbc.com/zhongwen/simp/focus_on_china/2016/05/160516_cr_cultural_re...
- (8)高雨華「哈僑文革專家馬若德談毛時代與習時代（上）」、『紐約時報中文網 國際縱覽』、2016年4月27日。<http://cn.nytimes.com/china/20160427/cc27macfaquhar1/print>
- (9) Nathan, Vanderklippe. "China doesn't want people discussing the anniversary of the Cultural Revolution". *THE GLOBE AND MAIL*. May 20, 2016. <https://www.globeandmail.com/news/world/the-cul....>
- (10)王山「探求文革起因、總結文革教訓、審視文革流毒——美國華人舉行文革 50 周年系列研討會」, rfi 華語、2016年5月26日、<http://cn.rfi.fr/%E4...>
- (11) Hannah, Gardner. "China buries memories of Violent Cultural Revolution 50 years after". *USATODAY*. May 12, 2016. <http://www.usatoday.com/story/news/world/2016/05/12/china-cultural-revolution-50th-anniversary/....>
- (12) Kerry, Brown. "The Cultural Revolution: An Anniversary steeped in Embarrassment". *THE DIPLOMAT*. Apr 16, 2016. <http://thediplomat.com/2016/04/the-cultural-revolution-an-anniversary-steeped-in-em...>
- (13)徐友漁「警惕文化革命重現是一個現實課題」、rfi 華語、2016年7月26日。<http://cn.rfi.fr/>

%E4%B8%AD%E5%9B%BD/20160726-%E5%BE%90%E5%8F8D.....

(14)張煒、前揭(7)。

(15)「專訪孫文広(1)：文革個人崇拜絕對權威貽害至今」、VOA 中文、2016 年 5 月 17 日。

<http://m.voa.chinese.com/a/voa-news-exclusive-interview-with-political-victim-on-cultural...>

(16)Tom,Phillips. "China marks 50 years since Cultural Revolution with silence",

Guardian. May16,2016. <http://www.theguardian.com/wprld/2016/may/16/china-marks-50-years-since-cultural>

(17)Chris Buckley. "50 years after the Cultural Revolution, a Son Awaits Answers on His

Father's Death". *The New York Times*.May14,2016.<https://nytimes.com/2016/05/15/world/asia/china>

(18)Chris Buckley, Didi Kirsten Tatlow, Jane Perlez,and Amy Qin. "Voices from China's

Cultural Revolution". *The New York Times*. May16,2016.<http://www.nytimes.com/interactive/2016/05/16/world>. "The Cultural Revolution, 50 years on: It was the worst of times; China is still in denial about its "spiritual holocaust". *The Economist*.May 14,2016. <http://www.economist.com/node/21698701/print79.html> 秦暉「對文革的四種判斷」、『愛思想』、2014 年 12 月 1 日。 <http://www.aisixiang.com/data/807>

(19)魏京生「文革五十周年—世紀教訓」、《自由亞州電台普通話 (Radio Free Asia

Mandarin) 》、2016 年 4 月 29 日。<http://www.rfa.org/mandarin/pinglun/weijingsheng>

Chris Buckley, Didi Kirsten, Jane Perlez, and Amy Qin, 前揭(18)。

(20)Chris Buckley, 前掲(17)。

(21) Cary,Huang. "China must let the dark deeds of Cultural Revolution come to light",

South China Morning Post. May13,2016. [http://www.scmp.com/print/comment/insig](http://www.scmp.com/print/comment/insight-opinion/article/1943970/china-must-let....)

[ht-opinion/article/1943970/china-must-let....](http://www.scmp.com/print/comment/insight-opinion/article/1943970/china-must-let....)

(22)瑞迪「学者章立凡：要反思文革、因為暴力起因還在周期性發作」、rfi 華語、2016 年 5 月

25 日。 <http://cn.rfi.fr/%E4%B8...>

(23)Huang、前掲(21)。

(24)Didi, Kirsten,Tatlow. “Q and A.:Tomas Plankers on thePyschic legacy of the Cultural

Revolution”. *The New York Times*. Apr28,2016.[http://www.nytimes.com/201](http://www.nytimes.com/2016/04/28/world/asia/china)

[6/04/28/world/asia/china](http://www.nytimes.com/2016/04/28/world/asia/china)

(25)Jane,Perlez. "Q and A.:Zha Jianying on the Remembering Cultural Revolution". *The*

New York Times. Feb12,2016.<https://www.nytimes.com/2016/02/13/world/asia/>

[china](https://www.nytimes.com/2016/02/13/world/asia/)

(26)王山、前掲(10)。

(27)ハンナ・アレント「集団責任」(1968)、ハンナ・アレント、ジェローム・コーン、中山

元訳『責任と判断(*RESPONSIBILITY AND JUDGEMENT*)』筑摩書房、2016 年、p.274、

pp.277,278。

(28)張煒、前掲(7)。

(29)同上。

(30)高雨華「哈仏文革專家評当年毛主席与今日習主席(下)」、『紐約時報中文網 國際縱覽』

2016 年 4 月 28 日。<http://cn.nytimes.com/china/20160428/cc28macfarquhar2/print>

(31) Jonathan Kaiman. "Chinese Cultural Revolution's 50th anniversary observed with silence", *Portland Press Herald*. May17,2016.<http://www.pressherald.com/2016/016/5/16/china...>

(32)ハンナ・アレント「道徳哲学のいくつかの問題」(1965-66)、ハンナ・アレント、ジェローム・コーン、中山訳、前掲(30)、p.91。

(33)張焯、前掲(7)。

(34)同上。

(35)同上。羅拉「文革毀滅中国人的人性大家都是犧牲品」、rfi 華語、2016 年 6 月 25 日。

<http://cn.rfi.fr/%E4%B8%AD%E5%9B%BD/20160625-%E6%96%87%E9%9D%A9....>

蕭洵 任禹陽 郁安「文革 50 年 幽靈依旧在」、VOA 中文 2016 年 5 月 14 日、<http://www.voachinese.com/a/exiled-chinese-dissider....>

(36)羅宇「民族悲哀 從不檢討錯誤」、『開放網』 2016 年 5 月 30 日、<https://www.open.com.hk/content.php?id=2845>

(37)Ragner,Baldursson. "What it was like to be a foreign exchange student in Beijing at the end of the Cultural Revolution". *Los Angeles Times*, May15,2016. <http://www.latimes.com/world/asia/lafg-cultural-revolution-anniversary-20160515-s....>

(38)Lijia,Zhang. "China's Cultural Revolution must be confronted: The enemies of the state existed nowhere but in the muddled head of the ageing "Great Helmsman", *Al Jazeera English*. aljazeera.com/indepth/opinion/2016/02/china-cultural-revolution

n-confronted-mao-zedong-160224101340248.html

(39)高雨華、前掲(8)。

(40)James,Brennan. "What the 50th anniversary since the Cultural Revolution means to China today". *East Asia Gazette*. March17,2016.<http://asia-gazette.com/china/2016/3/what-50th-anniversary...>

(41)*The Economist*, 前掲(18)。

(42)Brennan, 前掲(40)。

(43)徐友漁、前掲(13)。

(44)Jane, Perlez, 前掲(25)。

(45)高文謙「毛の文革遺産与習近平治国模式（一）」、VOA 中文、2016 年 5 月 5 日確認
<http://m.voachinese.com/a/gao-wenqian-cultural-revolution-part1-20160505/331722>

(46)ANDREW BROWNE. "XI Embraces Mao's Radical Legacy". *THE WALL STREET JOURNAL*. May13,2016.<http://www.wsj.com/articles/in-china-xi-embress-radical-legacy-1463123126>

第 6 章

(1)「現代史」『中国政府網』 www.gov.cn/guoqing/2020-10/29/contents-5555722.htm (2021 年 5 月 2 日最終確認)。

(2)「習氏、長期政権へ布石 6 中総会開幕 権威向上「歴史決議」」『読売新聞』、2021 年 11

月 9 日。

- (3) 「《中国共産党簡史》出版發行」『新華網』 2021 年 2 月 26 日、www.xinhuanet.com/book/2021-02/26/c_139768604.htm (2021 年 7 月 10 日最終確認)。「中央の指導者同志」については、具体的な人名は明らかにされていない。
- (4) 本書編写組『中国共産党簡史』人民出版社、中共党史出版社（北京）、2021 年、p.206。
- (5) 同上、p.215。
- (6) 同上、pp.214,215。
- (7) 「中共中央關於党的百年奮闘重大成就和歷史經驗的決議（全文）（2021 年 11 月 11 日中国共産党第十九届中央委員会第六次全体会議通過）」『中華人民共和国中央人民政府』、2021 年 11 月 16 日、www.gov.cn (2022 年 2 月 1 日最終確認)。
- (8) 汪暉、石井剛・羽根次郎訳『世界史のなかの中国：文革・琉球・チベット』青土社、2011 年。
- (9) 石井知章「重慶事件における新左派の役割と政治改革のゆくえ」『オルタ』102 号、2012 年。<https://www.alter-magazine.jp/index.php/重慶事件における新左派の役割と政治改革のゆくえ> (2021 年 5 月 1 日最終確認)。石井知章「中国社会主义国家における「保守」と「守旧」－「左派」を基軸とする思想状況をめぐり」『政治思想研究』第十八号、2018 年 5 月、pp.107~123。宇野木洋「關於“現代性”的幾個問題－作為一名日本学者共同思考」『立命館文学』615 号 www.ritsumei.ac.jp/acd/cd/lt/rb/615/615PDFunoki.pdf (2021 年 5 月 2 日最終確認)。
- (10) 張博樹、石井知章・及川順子・中村達雄訳『新全体主義の思想史：コロンビア大学現

代中国講義』白水社、2019 年。

- (11) 銭理群『毛沢東時代和後毛沢東時代 (1949-2009) 另一种歷史書写 (下)』聯經出版事業股份公司 (台北)、2012 年、p.324。裴毅然『烏托邦的幻滅：延安一代士林』新銳文創、秀威資訊科技股份有限公司 (台北)、2015 年、p.511。

- (12) 石井、前掲(9)、2012 年。

- (13) 興梠一郎「中国の現実に向き合うかー「自由主義者・新左派論争」の背後ー」『現代中国における思想、社会と文化』愛知大学国際中国学研究センターCOE プログラム最終報告書、2007 年。iccs.aichi-u.ac.jp/archives/report/002/002-07-07pdf (2021 年 5 月 1 日最終確認)。

- (14) 2021 年 7 月現在、「反第二回歴史決議系新左派」の文革再評価論を積極的に発信しているウェブサイトとしては「烏有之郷(UTOPIA)」(<http://wyzxwk.com>)、「復興網」(<http://www.linxia930.com/mzfxw/>)、「毛沢東思想旗幟網」(<http://maoflag.cc>)、「紅歌会網」(<https://www.szhgh.com>)、「崑崙策」(<https://www.kunlunce.com>)、「中工網」(<http://www.worker.cn>) 等が挙げられる。このうち「復興網」は記事内容を分類する際、「社会主義復興」と「中華民族復興」という二つの区分を設定している。ここからは、文革再評価論と中華民族主義的意識の融合を巡る、同サイトとその管理者の認識を窺い知ることができるであろう。

- (15) 石井、前掲(9)、2018 年。

- (16) 裴毅然、p.511。

- (17) 何方『党史筆記：從遵義會議到延安整風 (增訂版)』香港城市大学出版社 (香港)、2019

年、p.699。

- (18) 高文謙によれば、万里（1906-1996:文革発動時は北京市副市長）は共産党書記処のある会議の席上、今後は「毛沢東思想」という概念を提起しないよう、主張したという。高文謙「毛的文革遺産与習近平治国模式（一）」『美国之音中文網(voachinese)』2016年5月6日。<https://www.voachinese.com/a/gao-wenqian-cultural-revolution/part1>
(2021年7月28日最終確認)

- (19) 丁礼庭「毛沢東発動“文革”の動機、理論、実践全部錯了一就毛沢東発動文革的動機問題和李慎明先生商榷」『愛思想』2011年12月5日。<http://m.aisixiang.com/data/47691.html> (2021年4月30日最終確認)。陳破空「文革50年：一個失去了反省能力的国家」『自由亞州電台普通話(Radio Free Asia Mandarin)』2016年5月16日。<https://www.rfa.org/mandarein/pinglun/chenpokong/cpk05152016104647.html>
(2021年5月9日最終確認)。

- (20) 丁礼庭、陳破空、同上。

- (21) 丁礼庭、前掲(19)。

- (22) 馬賓「170名黨員、幹部对党的十七大献言書」、2007年。『復刻版 批判与再造』
<https://critiqueandtransformation.wordpress.com/2007/10/2...> (2021年4月28日最終確認)。馬賓、惲仁祥、李波「高举馬克思列寧毛沢東主義偉大旗幟 挽救国家和民族於危亡呼吁書—紀念毛沢東主席誕辰120周年」『紅歌會網』、2013年7月11日。www.szhgh.com/Article/news/politics/... (2021年7月1日最終確認)。

- (23) 錢理群、前掲書、pp.324,325。張博樹、石井・及川・中村訳、前掲書、pp.162,163。

(24)馬賓、前掲(22)、2007 年。

(25)惠風「俞正声談毛沢東發動文革：道路是錯誤的」『多維新聞』、2017 年 9 月 30 日、
<https://www.dwnnews.com> (2021 年 4 月 30 日最終確認)。無署名記事「夜話中南海 黃
敬親属在文革中的悲慘遭遇」『自由亞州電台普通話(Radio Free Asia Mandarin)』、
2019 年 12 月 20 日 <https://www.rfa.org/mandarin/zhuannlan...> (2021 年 4 月 30 日最
終確認)。

(26)同上。

(27)習近平「毫不動搖堅持和發展中国特色社会主義在实践中不断有所發現有所創造有所前
進」『共產黨員網』2013 年 1 月 6 日 news.12371.cn/2013/01/5VIDE135738... (2021
年 5 月 1 日最終確認)。

(28)「紅衛兵」世代が、中華人民共和国が成立した 1949 年前後に誕生した世代であるの
に対し、「紅小兵」世代は 1950 年代末から 1960 年代初めに生まれた世代にあたる。

(29) 無署名記事「繼胡鞍鋼後、再有清華教授因文革言論遭猛批」『阿波羅新聞網』、2018 年
8 月 12 日 hk.aboluowang.com (2021 年 4 月 30 日最終確認)。

(30)高新「夜話中南海 左派文人擁戴習近平為毛主席恢復名譽」『自由亞州電台普通話
(Radio Free Asia Mandarin)』、2011 年 5 月 14 日 [https://www.rfa.org/mandarin/zhan
lan...](https://www.rfa.org/mandarin/zhanlan...) (2021 年 5 月 1 日最終確認)。

(31)李慎明「毛沢東關於保持党和政權永不變質戰略思想產生的淵源、發展脈絡及相關思考」
『中工網』、2011 年 11 月 30 日 theory.workercn/c/2011/11/30/11113011... (2021 年 4
月 28 日最終確認)。

- (32) 李慎明「正確評價改革開放前後兩個歷史時期」『人民網 中國共產黨歷史網』、2013 年 2 月 7 日 theory.people.com.cn (2021 年 4 月 28 日最終確認)。
- (33) 李慎明、前掲(31)。
- (34) 同上。
- (35) 同上。
- (36) 張博樹、石井・及川・中村訳、前掲書、p. 164-179。
- (37) 張宏良「目前對毛主席最好的紀念方式就是突破“三七開”的反毛底線－在紀念毛主席誕辰 127 周年晚會上的講話」『復興網』、2021 年 4 月 22 日 www.mzfxw.com/m/show2.php/classid=12&id=142188... (2021 年 7 月 12 日最終確認)。
- (38) 唐青釗「略論於幼軍首課的標本意義」『烏有之鄉(UTOPIA)』、2015 年 12 月 15 日 www.wyzzwk.com/Article/zatan/2015/12/356407.html (2021 年 4 月 30 日最終確認)。
- (39) 張宏良「不解決文革問題、馬克思主義就不可能占領高校等意識形態」『復興網』、2015 年 2 月 www.mzfxw.com/m/show2.php?classid=12&id=142188... (2021 年 7 月 10 日最終確認)。
- (40) 張宏良、同上。張宏良「“全面否定文革”已經成為敵對勢力宰殺中國的一把政治尖刀」『復興網』、2016 年 2 月 23 日 www.mzfxw.com/e/action/showInfo.php... (2021 年 5 月 1 日最終確認)。
- (41) 張宏良、同上。
- (42) 同上。
- (43) 張宏良、前掲(39)。

(44) 李彬「歴史虚無主義的学術及現実維度解析」『経済導刊』2015年第11期。 <https://www.jinijidaokan.com> (2021年5月1日最終確認)。

(45) 前掲(29)。無署名記事「清華新聞伝播学院副院長李彬認為文革不宜用“浩劫”来概括」『地方文革史交流網』2018年8月9日。 difangwenge.org (2021年5月1日最終確認)。

(46) 李彬「符号与政治的名实之弁」『経済導刊』2018年1月11日。 www.jinijidaokan.com/ (2021年5月1日最終確認)。

(47) 同上。

(48) 同上。

(49) 劉頌、行超「王蒙：《这边风景》就是我的“中段”」『中国社会科学網』、2013年6月7日 www.cssn.cn/st_zjkfg/201310/..... (2021年7月10日最終確認)。

(50) 王蒙(1934-)の長編小説『こちらの風景(這辺風景)』は、王が文革期の1974年に、当時の居住地であった新疆ウイグル自治区で執筆を開始し、1978年に完成。文革前の同自治区イリ地方カザフ自治州の人民公社で発生した食料盗難事件を題材とし、事件に巻き込まれた人々の姿を、ウイグルの風俗習慣を背景としながら描く。王蒙は本作の完成後、当時の「政治状況」などを反映し原稿を「封印」した。そして、執筆開始から約四十年後の2013年に初めて出版され、2015年に「第九回茅盾文学賞」を受賞した。このような経緯や同作の執筆動機を巡る王蒙の発言に着目した場合、この作品を文革の「成果」と位置付ける李彬の評価は牽強附会の感を免れない。

(51) 前掲(29),(45)。

(52) 呉文新「在馬克思主義指導下推進中国特色社会主义文化創新—紀念馬克思誕辰200

周年暨馬克思主義与文化創新研討会総述」『馬克思主義文化研究』、2018年第1期、

総第1期。 <https://mlb.wh.sdu.edu.cn/local/8/c4/47/50F182B6481..> (2021年4月30日最終確認)。

(53)唐青釗「文革の礼賛与礼葬：斯芬克斯之謎一樣的革命」『復興網』、2015年6月28日。

www.mzfxw.com/e/action/ShowInfo.php?classid=21&id=41832 (2021年4月30日最終確認)。

(54)唐青釗、前掲(38)。

(55)唐青釗「文革：煉獄之火炙烤中国人靈肉的革命（三）」『毛沢東思想旗幟網』、2015年7月26日。 www.maoflag.cc/portal.php?mod=view&aid=1446 (2021年4月29日最終確認)。

(56)同上。

(57)同上。

(58)唐青釗、前掲(38)。

(59)唐青釗、前掲(55)。

(60)同上。

(61)唐青釗「文革：煉獄之火炙烤無產階級專政的革命（一）」『復興網』、2015年8月15日。 mzfxw.com/m1/show1.php?classid=11&id... (2021年4月30日最終確認)。

(62)ダンテ『神曲 (*LA DIVINA COMMEDIA*) (中) 浄火』岩波文庫版、山川丙三郎訳、1953年、p.170。

(63)「煉獄」は本来、カトリック教会の教義において、人間が死後に「天国の幸いを受

ける前、心の汚れを完全に清め、残された償いを果たす」場所とされる。カトリック中央協議会『カトリック要理』、サンパウロ、1972年、p.117。

(64)唐青釗「文革：煉獄之火炙烤中国人靈肉的革命（一）」『復興網』、2015年7月13日。

www.mzfxw.com/e/action/ShowInfo.php?classid=12&id=43170 (2021年5月5日最終確認)。

(65)唐青釗、前掲(61)。

(66)同上。

(67)唐青釗、前掲(38)。

(68)同上。

(69)李慎明、前掲(32)。

(70)同上。

(71)李慎明、前掲(31)。

(72)李慎明「实事求是地評價毛沢東晚年探索中的失誤」『毛沢東研究』創刊号、2014年。

www.dswxyiy.cm/GB... (2021年7月1日最終確認)。

(73)李慎明「正確理解毛沢東關於“党不變質”思想」『紅色文化網』、2013年12月25日。

m.hswwh.org.cn (2021年4月28日最終確認)。

(74)李慎明、前掲(31)。

(75)唐青釗、前掲(38)。

(76)同上。

(77)唐青釗、前掲(61)。

(78)唐青釗、前掲(38)。

(79)張宏良、前掲(40)、2016 年。

(80)張宏良、前掲(37)。

(81)ハンナ・アレント、ジェローム・コーン編集、中山元訳『責任と判断(*RESPONSIBILITY AND JUDGEMENT*)』筑摩書房、2016 年、pp.277,278。

(82)同上、p.91。

(83)拙稿「「50 周年」「40 周年」そして「35 周年」－世界が見た「2016 年」」『中国研究月報』、一般社団法人中国研究所、2016 年 12 月号、Vol.70(No.826)、p.11。

参考文献・資料

中国語(配列はピンイン順)

安建設編『周恩来的最後歲月：一九六六——一九七六』中央文獻出版社（北京）、1995 年。

北島、曹一凡、維一主編『暴風雨的記憶：1965-1970 年的北京四中』牛津大學出版社（香港）、2011 年。

本社編寫組『中國共產黨簡史』人民出版社、中共黨史出版社（北京）、2021 年。

曾志『一個革命的幸存者：曾志回憶實錄（上）（下）』廣東人民出版社（廣州）、1999 年。

陳煥仁『紅衛兵日記』中文大學出版社（香港）、2006 年。

陳佩華『毛主席的孩子們：紅衛兵一代的成長和經歷』桂冠圖書（台北）、1997 年。

陳揚勇『苦掌危局：周恩來在一九六七』中央文獻出版社（北京）、1999 年。

陳益南『青春無痕：一個造反派工人的十年文革』中文大學出版社（香港）、2006 年。

『大字報選（一）（二）』一院紅衛兵總部、1966 年（編集地不明）。

丁望主編『中共文化大革命重要資料彙編（一）—（六）』明報出版社（香港）、1972 年。

《兒童文學》編集部編『《兒童文學》二十年優秀作品選：1963～1983』中國少年兒童出版社（北京）、1983 年。

斐毅然『烏托邦的幻滅：延安一代士林』新銳文創、秀威資訊科技股份有限公司（台北）、2015 年。

何方『黨史筆記：從遵義會議到延安整風（增訂版）』香港城市大學出版社（香港）、2019 年。

『建國以來毛澤東文稿（一一）、（一二）』中央文獻出版社（北京）、1996 年。

劉国凱『文化革命簡析』博大出版社（香港）、2006 年。

『廣州紅旗派的興亡』博大出版社（香港）、2006 年。

『基層文革泥濘路』博大出版社（香港）、2006 年。

劉青峰編『文化大革命：史實與研究』中文大学出版社（香港）、1996 年。

劉文忠『反文革第一人及其同案犯』澳門崇適文化出版拓展有限公司（マカオ）、2008 年。

魯礼安、王紹光『仰天長嘯：一個單監十一年的紅衛兵籲天錄』中文大学出版社（香港）、

2005 年。

羅德里克·麦克法夸尔(馬若德)、何柞康等譯、王笑歌譯校『文化大革命的起源：浩劫的來臨

1961-1966 年(*The Origins of the Cultural Revolution3:The coming of the
Cataclysm, 1961-1966*)』新世紀出版（香港）、2012 年。

麥克法夸尔(Roderick, MACFAQUHAR)、沈邁克(Michael, SHOENHALS)、關心譯、唐少傑校『毛澤

東最後的革命 (*MAO'S LAST REVOLUTION*)』星克爾出版（香港）、2009 年。

穆欣『劫後長憶：十年動亂紀事』新天出版社（香港）、1997 年。

米鶴都『紅衛兵這一代』三聯書店（香港）、1993 年。

『聚焦紅衛兵』三聯書店（香港）、2007 年。

《北京伝奇》策画、米鶴都主編『回憶與反思：紅衛兵時代風雲人物一口述歷史之一』同『二』

中国書局有限公司（香港）、2011 年。

潘鳴嘯 (MICHEL BONNIN)、歐陽因 (ANNIE AU-YANG) 譯『失落的一代：中国的上山下鄉運動：

一九六八至一九八零(*Generation Perdue:Le mouvement d' envoi des jeunes instruits
a la campagne en Chine, 1968-1980*) 』中文大学出版社（香港）、2018 年。

馮客(FRANK, DIKÖTTER)、向淑容、堯嘉寧訳『文化大革命：人民的歷史 1962-1976 (*THE CULTURAL REVOLUTION, 1962-1976*)』聯經出版(台北)、2017年。

錢理群『毛沢東時代和後毛沢東時代：另一種歷史書寫(上)(下)』聯經出版事業股份公司(台北)、2012年。

沈福祥『崢嶸歲月：首部工人造反派回憶錄』時代國際出版有限公司(香港)、2010年。

宋伯林、余汝信編注『紅衛兵興衰錄：清華附中老紅衛兵手記』德賽出版有限公司(香港)、2006年。

宋永毅・孫大進『文化大革命和它的異端思潮』田園書屋(香港)、1997年。

宋永毅主編『文化大革命：歷史真相和集體記憶(上)(下)』田園書屋(香港)、2007年。

『文革五十年：毛沢東遺產和當代中國(上)(下)』明鏡出版社(ニューヨーク)、2016年。

孫月才『文革十年日記』中文大學出版社(香港)、2012年。

滕叙兗『開國元帥的子女們：哈軍工高幹子女傳記』廣東人民出版社(廣州)、2010年。

王年一『20世紀的中國(8)：大動亂的年代』河南人民出版社(鄭州)、2004年。

王紹光『理性與瘋狂：文化大革命中的群眾』牛津大學出版社(香港)、1993年。

『超凡領袖的挫敗：文化大革命在武漢』中文大學出版社(香港)、2009年。

王友琴『文革受難者：關於迫害、監禁與殺戮的尋訪實錄』開放出版社(香港)、2004年。

吳慶彤『周恩來在“文化大革命”中：回憶周總理同林彪、江青兩個反革命集團的鬭爭(增訂本)』中共黨史出版社(北京)、2002年。

肖冬連等『求索中國：文革前十年史(上)(下)』紅旗出版社(北京)、1999年。

徐友漁『形形色色的造反：紅衛兵精神素質的形成及演變』中文大學出版社（香港）、
1999 年。

楊繼繩『天地翻覆：中國文化大革命史（上）（下）』天地圖書（香港）、2016 年。

楊曦光『牛鬼蛇神錄：文革囚禁中的精靈』牛津大學出版社（香港）、1994 年。

印紅標『失蹤者的足跡：文化大革命期間的青年思潮』中文大學出版社（香港）、2009 年。

余習広主編『位卑未敢忘憂國：文化大革命上書集』泰德時代出版（香港）、2006 年。

于輝編『共和國風雲叢書 紅衛兵秘錄』團結出版社（北京）、1993 年。

鄭謙、蘇采青主編『回首“文革”——中國十年“文革”分析與反思（上）（下）』中共黨史出版
社（北京）、2000 年。

鄭謙、張化編『毛澤東時代的中國（1949-1976）』中共黨史出版社（北京）、2003 年。

「中共中央關於建國以來黨的若干歷史問題的決議」1981 年 6 月 27 日。

「中共中央關於黨的百年奮鬥重大成就和歷史經驗的決議（全文）」2021 年 11 月 11 日。

『中共中央文化大革命重要文件彙編』『中共雜誌』社（台北）、中華民國 62 年。

周明主編、劉茵、姜強國編選『歷史在這裡沈思』北岳出版社（太原）、1989 年。

周孜仁『一個紅衛兵小報主編的文革記憶』新銳文創（台北）、2012 年。

CCP Document of the Great Proletarian Cultural Revolution, 1966-67（『中共中央重要
文件彙編（關於文化大革命）一九六六—六七』）、Kowloon, Hong Kong: Union Research
Institute, 1968.

Red Guard Publications（紅衛兵資料）. Reprinted by Center for Chinese Research
Materials Association of Research Libraries: Washington, D.C., 1975.

英語

HongYung,Lee, *THE RADICAL STUDENT IN KWANGTUNG DURING THE CULTURAL REVOLUTION*:The China Quarterly,No.64,Dec.1975.

Rorerick,Macfaquhar, *THE ORIGINS OF THE CULTURAL REVOLUTION 3.The coming of the Cataclysm,1961-1966*.New York.Harvard University Press,1997.

Vogel,Ezra.F. *Canton under Comminism·Programs and Politics in a Provincial capital, 1949-1968*.Cambridge, Mass.:Harvard University Press,1997.

日本語

天児慧等編『岩波現代中国事典』岩波書店、1999年。

天児慧『中国の歴史(11) 巨龍の胎動－毛沢東 vs 鄧小平』講談社、2004年。

エクトゥール・マンダレ編、山下佑一訳『毛沢東を批判した紅衛兵：紅衛兵通信集』日中出版、1976年。

エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』戸原四郎訳、岩波文庫版、2000年。

『空想より科学へ：社会主義の発展』大内兵衛訳、岩波文庫版、1999年。

汪暉、石井剛・羽根次郎訳『世界史のなかの中国：文革・琉球・チベット』青土社、2011年。

加々美光行『逆説としての中国革命〈反近代〉精神の敗北』田畑書店、1986年。

カトリック中央協議会『カトリック要理』サンパウロ、1972 年。

ゴードン・A・ベネット、ロナルド・N・モンタペルト編、山田侑平訳『紅衛兵だった私：戴
小艾の政治的伝記』日中出版、1978 年。

国分良成編著『中国文化大革命再論』慶應義塾大学出版会、2003 年。

ダンテ『神曲』岩波文庫版、山川丙三郎訳、2007 年。

張博樹、石井知章・及川順子・中村達雄訳『新全体主義の思想史：コロンビア大学現代中国
講義』白水社、2019 年。

陳凱歌、刈間文俊訳『私の紅衛兵時代』講談社、1990 年。

陳東林、苗隸、李丹慧主編、加々美光行監修、徳澄雅彦監訳、西紀昭、山本恒人、園田茂
人他訳『中国文化大革命事典』中国書店、1997 年。

東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳（上）（下）』三一書房、1975 年。

東方書店出版部『中国プロレタリア文化大革命資料集成（一）～（六）』東方書店、1970 年。

トロツキー、藤井一行訳『裏切られた革命』岩波文庫、2000 年。

ハンナ・アレント、ジェローム・コーン編、中山元訳『責任と判断』筑摩書房、2016 年。

マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登、田中吉六訳、岩波文庫版、2000 年。

『ゴータ綱領批判』望月清司訳、岩波文庫版、1999 年。

『フランスの内乱』木下半治訳、岩波文庫版、1995 年。

マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳、小林昌人補訳、岩波文庫版、
2002 年。

ユン・チアン、土屋京子訳『ワイルド・スワン（上）（下）』講談社、1993 年。

吉越弘泰『威風と頹唐：中国文化大革命の政治言語』太田出版、2005 年。

レーニン『国家と革命』宇高基輔訳、岩波文庫版、2000 年。

ロ德里ック・マックファーカー、徳田教之他訳『毛沢東の秘められた講話（上）（下）』

岩波書店、1992 年。

ウェブサイト

『阿波羅新聞網』 URL.hk.aboluowang.com

『愛思想』 URL.<http://m.aisixiang.com>

『BBC 中文網』 URL.<http://bbc.com/zhongwen>

『当代中国研究』 URL.<https://www.chinayj.net>

『地方文革史交流網』 URL.difangwenge.org

『多維新聞』 URL.<https://dwnews.com>

『法国国際廣播電台(Radio France International/rfi)華語』 URL.<http://cn.rfi.fr>

『復興網』 URL.<http://www.linxia930.com/mzfxw/>

『共産黨員網』 URL.news.12371.cn

『觀察(*Observechina*)』 URL.<http://www.observechina.net>

『紅歌会網』 URL.<https://www.szhgh.com>

『紅色文化網』 URL.m.hswb.org.cn

『環球網』 URL.<http://huanqiu.com>

『華夏文摘』 URL.<http://www.cnd.org>

『經濟導刊』 URL.www.jinjidaokan.com

『崑崙策』 URL.<https://www.kunlunce.com>

『馬克思主義文化研究』 URL.<https://mlb.wh.sdu.com>

『毛沢東思想旗幟網』 URL.<http://maoflag.cc>

『美国之音中文網(*voachinese*)』 URL.<https://www.voachinese.com>

『紐約時報中文網』 URL.<http://cn.nytimes.com/china>

『澎湃新聞』 URL.<https://www.thepaper.cn>

『人民網』「人民書城」 URL.<http://www.booker.com.cn>

『烏有之鄉(UTOPIA)』 URL.<http://wyzxwk.com>

『新華網』 URL.www.xinhuanet.com

『中工網』 URL.<https://www.worercn.cn>

『中国社会科学網』 URL.www.cssn.cn

『中華人民共和國中央人民政府』 URL.www.gov.cn

『中時新聞網』 URL.<https://www.chinatimes.com>

『自由亞州電台普通話(*Radio Free Asia Mandarin*)』 URL.<https://rfa.org/mandarin>

あとがき

本書は、筆者の研究生活における最初の単著である。今回、筆者に本書の出版という貴重な機会をくださった東京大学現代中国研究拠点の丸川知雄先生及び同拠点の先生方、ならびに関係各位に、この場を借りて心からの感謝を申し上げたい。本書は丸川先生をはじめとする現代中国研究拠点の先生方のご快諾により、世に出ることが出来たのである。また、東北大学大学院国際文化研究科での筆者の正・副指導教官であった山田勝芳、岡洋樹、瀬川昌久各先生にも感謝申し上げる。

本書は、これまで複数の学術誌に掲載された拙稿を中心とし、さらに新たに書き下ろしを一章分加えたものである。各章の初出は以下のとおりである。

第1章 「「極左派」紅衛兵批判を巡る一考察－広東省「旗」派の事例」『現代中国』(78)、

日本現代中国学会、2004年、pp. 59-70 を改題、加筆修正。

第2章 「中国文化大革命期における紅衛兵の「極左思潮」について－革命委員会の成立

を巡る動きを中心に」『アジア経済』Vol. 46(9)、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2005年、pp. 28-41 を加筆修正。

第3章 「文化大革命初期の民間言説に見る「社会主義」認識について－紅衛兵と上書者

の言説との比較において」『中国研究月報』Vol. 62, No. 4(No. 722)、一般社団法人中国研究所、2008年、pp. 1-18 を加筆修正。

第4章 「紅衛兵世代における読書動向について－文化大革命以前を中心に」『中国 21』

Vol. 39、愛知大学現代中国学会、2014 年、pp. 147-165 を加筆修正。

第 5 章 「『50 周年』『40 周年』そして『35 周年』－世界が見た『2016 年』『中国研究月報』Vol. 70(12)、一般社団法人中国研究所、2016 年、pp. 2-15 を加筆修正。

第 6 章 書き下ろし。

第 1 章から第 5 章までは、内容、構成共に初出時の形を基本とした上で、文言の修正や補足を加えたものである。今回、拙著の出版に際して全面的な見直しを行うことも考えたが、最終的に元々の形を可能な限り残すこととした。また、第 6 章では習近平指導部と文革の親和性や昨今の中国の政治、社会等の各領域での「文革的」な事象の出現、さらに 2021 年 11 月の中国共産党第十九期六中全会における三回目の「歴史決議」の採択といった状況を踏まえ、21 世紀の中国での文革の影響について、インターネット上での文革再評価論～事実上の文革擁護論といってもよいであろう～の展開という事象に着目し考察を試みた。紅衛兵に関する第 1 章から第 4 章までと、21 世紀の中国における文革認識に関わる第 5、6 章という構成により、本書の題名であり、かつ筆者にとっての関心事でもある「文化大革命と 21 世紀中国」を巡る問題について、自分なりの見方を示すことが出来たのではないかと考えている。この点に関して、読者各位のご教示をいただければ幸いである。

21 世紀に入ってから十年以上を経た 2012 年末、中国では習近平新指導部が発足した。改革派指導者として知られた習仲勲(1913-2002)を父に持つ習近平の総書記就任は、中国内外に政治改革への期待を広めた。しかし、本書でも述べたように、習近平指導部の成立

と前後し、中国国内では「第二回歴史決議」への異議と文革再評価論が続々と出現するに至った。習近平自身も文革時代への「郷愁」や「文革的」なものに対する自らの思いを隠そうとはしない。そして、「文革的」とも評される政治手法を用いた統治スタイルは、日々顕著なものとなってきた。無論、それが、紅衛兵が「走資派」を批判闘争にかけるといった意味での文革の再現とは異なること、そして再度の文革の発動へと結びつくものでないことは、いうまでもない。また、そのような風潮に抗する動きが存在することも、忘れてはなるまい。一方では、本書の冒頭でも挙げた「文革レストラン」や「広場舞」に加え、インターネットの動画サイト「Youtube」には文革時代の音楽の動画が数多く登場し、それらのコメント欄には「毛主席は永遠に人民の心の中の赤い太陽だ」「プロレタリア文化大革命万歳」といった、文革期そのままの書き込みが多くみられる。これもまた、21世紀の中国での文革認識に関わる一側面であろう。いえることは、「文革的」なものが完全に克服されない限り文革が本当の意味で「歴史」になることはないであろう。

それとの関連でやや乱暴なことを言えば、筆者は昨今の中国における「文革的」ものの復活の背後に、経済成長によって生じた社会的格差等に対するアンチテーゼとしての側面に加え、政治のみならず社会生活をも含む幅広い領域における、ある種の解決困難な問題への「処方箋」あるいは「即効性」を伴う解決手段としての価値を、そのなかに見出す感覚とでもいうべきものが存在しているのではないかと考えている。この見方は筆者の主観の域を出るものではないが、もし現在の中国において文革がこのような形で影響を残しているのであれば、そのような感覚はそれ自体、中国の将来に容易ならざる結果をもたらすように思われるのである。「文革的」なものを将来にわたって、自覚的あるいは無自覚

に受け入れるのか、それともその本質に向き合った上で自覚的に克服するのか、これこそが 21 世紀の中国そして中国人に課せられた「宿題」であろう。アメリカの哲学者であるジョージ・サンタヤーナ (*George, Santayana. 1863-1952*) の「過去を覚えていない者は、過去を繰り返す運命にある (*Those who don't remember the past are condemned to repeat it*)」という格言、そして日中両国間での「歴史認識」を巡って中国側から提起される「歴史を鑑とする (以史為鑑)」という言葉はともに、文革という「宿題」に向き合う 21 世紀そして将来の中国人にとっても、重要な意味をもってくるであろう。曲がりなりにも文革研究に携わる人間の一人として、21 世紀の中国そして中国人がこの「宿題」にいかに取り組んでいくのか、今後も見守り続けてゆきたい。

筆者の研究生生活は、東北大学大学院国際文化研究科への入学から始まった。そもそも、筆者が東京ではなく現代中国関連の研究がほぼ皆無であった地元の仙台へ戻り同研究科の門を叩いたのは、その当時設置から五年程度であった若い研究科の潜在的な可能性に魅力を感じたことに加え、東北、そして仙台から現代中国・アジア研究の新たな流れを起こしたいという「野望」らしきものを持っていたからであった。しかし、実際には「同業者」が皆無であった当時の仙台において、その後の道程はあらゆる点で予想以上に困難なものであった。ましてや、本書の冒頭部分でも述べたように、文革研究そのものが現代中国研究において重要な課題と認識されつつも、実際に専門的に取り組む研究者が極めて少ない状況にあって、筆者の研究活動は文字通り手探り状態で進んでいった。さらにいえば、「第二回歴史決議」以降の中国が改革開放政策へと転じ、特に 1992 年の鄧小平による南巡講話とその後

の経済成長によって中国の経済が急速な発展を遂げるに及び、文革はもはや「過去の遺物」
となった感さえあった。このような現実を考えれば、「いま、この時」に文革を敢えて研究
対象とすることの意味について周囲を納得させ得る「答え」を示すことは、必ずしも容易で
はなかった。しかし、筆者がそれでもなお文革というテーマに取り組んだのは、文革が中国
の政治と社会さらに人々の心理に残した影響は一回の「歴史決議」の発表という、ある種紋
切型とでもいうべき「文言」によって解決し得るものではなく、今後も長期にわたって中国
という存在そのものの在り方を程度の差こそあれ、左右し続けるであろうとの思いからで
あった。とはいえ、それについての何らかの「手がかり」や方法論が容易に見つかるはずも
なく、悪戦苦闘の日々が続いた。

そのようななかで、2010 年前後に、後述する佐治俊彦先生の文革科研のメンバーとして
広東省汕頭の「文化大革命博物館」を初めて訪問した際の何気ない一コマは、「80后」「9
0后」世代における文革への意識を象徴的に示すものとして、筆者に強い印象を与えた。「文
化大革命博物館」のある汕頭市澄海地区は同市での文革期の武闘の「重災区」であり、博物
館の敷地となっている山の随所には、かつての武闘で犠牲となった紅衛兵、造反派の遺体が
眠っていた。敷地内の至るところに設置された墓標に刻まれた彼らの年齢がほぼ全て、十代
後半から二十代前半であるという事実を前に、若くして命を失った彼ら一人一人の人生を
思い、一抹の「悔しさ」とでもいうべき感情が沸き起こるのを禁じ得なかった。

この博物館には高速道路のサービスエリアとほぼ同じ広さの駐車場があり、その入り口
には「第二回歴史決議」の文言と鄧小平の写真を刻んだ巨大な石板が設置されていた。筆者
を含む一行が訪問した時、その巨大な駐車場には一台も車が停まっていなかった（曜日の関

係もあったのかもしれないが)。そして、博物館の見学を終えて駐車場に戻ってきたとき、そこにいたのは十代後半から二十代前半と思しき、髪の毛を茶色に染めた地元の青年達であった。彼らはその広い駐車場で大型バイクをゆっくり走らせながら、談笑していた。同年代の日本人の若い男性の休日の過ごし方と何ら変わらないであろう、このごくありふれた光景を目にした時、筆者はその場所であつて繰り広げられた武闘の犠牲者と、目の前でバイクを乗り回している青年達の姿を重ね、歴史の流れ、そして言いようのないギャップ（という言葉では表現しきれないが）をこれまでになく強く感じた。彼等にとって、かつて多くの若者が命を落としたその場所は、「他人に邪魔されることなくバイクで遊べる」近所の穴場ぐらいの位置付けでしかなかったのかもしれない。「君たちは、ここがどんな場所か分かっているのか?」。直接問いかけたい思いを、無理やり抑え込んだ。

この、それ自体には一見して何ら注目すべき要素のない、したがって通常であれば記憶にすら残らないであろう経験は、本書の冒頭で述べた仙台での中国人留学生に対する「フィールドワーク」的試みとも相まって、筆者に鮮烈な印象を与えた。筆者は、仙台と中国という二つの場で触れた「80后」「90后」世代の文革への認識、あるいはそれを推測し得る出来事を通じ、文革という時代を経験しなかった彼等の「幸運」を思うと共に、彼等にとって文革が自分には関わりのない「過去」のものになりつつあるのだ、と実感したのであった。同時に、それが中国の将来を担う青年達にとっていかなる意味を持つのかということに、思いを致さずにはいられなかった。

一方で、「なぜ」「いまこの時」に文革を研究するのか、という筆者にとっての課題は重くのしかかったままであった。周囲からは、「そのような“生産性のない”研究は“する意味

がない”から、もう“やめて”はどうか」、「もっと“世の中にとって役に立つ”テーマを選んでどうか」という辛辣な声さえ聞こえてきた。それにも関わらず、文革と「文革的」なものは中国の未来を左右する要素となるであろうとの思いから、筆者はその後も孤軍奮闘状態で文革研究を続けた。それはあたかも、暗闇の中で見えない標的へ向けて矢を放つがごときものであった。

このような状況のなかで筆者の研究生生活におけるモチベーションとなったのは、日本現代中国学会、アジア政経学会、そして近年主流になっているオンライン形式の研究会でご指導いただいている先生方からの、時に厳しくも温かい激励であった。特に、佐治俊彦先生は、研究室を離れた後の筆者の研究生生活を様々な形で支えてくださった。佐治先生との出会いは、筆者が大学院在籍中のある年に仙台で「日本中国学会」の全国大会が開催された時点に遡る。それ以来、佐治先生には様々な形でご指導をいただくこととなった。とりわけ、佐治先生が代表の「文化大革命の文化史的再考」（2007－2009、基盤研究(B)）、「文化大革命と中国の知識人」（2010－2012、基盤研究(B)）という二つの科研費に研究協力者という立場で参加させていただいた。その一環として、先述の「文化大革命博物館」への訪問を含む中国、香港での現地調査や学術交流にも同行させていただいた。これらの経験は、先の見えない在野生活を送っていた筆者にとって研究への大きなモチベーションとなっただけでなく、今日に至るまでの研究生生活の大きな糧となっている。また、この二つの科研費では研究分担者として参加された多くの先生方からも貴重な指導をいただいた。そのお一人であった故・代田智明先生には、科研費「戦後日本における中国研究と中国認識」（2010－2012、基盤研究

(B))への参加という機会をいただいた。その成果は、代田先生が監修された『戦後日本の中国研究と中国認識：東大駒場と内外の視点』（東京大学出版会、2018年）の一章分という形で発表された。このように、佐治先生をはじめとする文革科研の先生方による温かい励ましにより、筆者は今日まで研究を続けることが出来たのである。特に、筆者も被災した2011年3月11日の「東日本大震災」発生後の出来事は、生涯忘れ得ないであろう。本来、筆者はその一週間ほど後に、佐治先生をはじめとする文革科研の先生方の北京への訪問に同行させていただく予定であった。しかし、震災とそれに伴う未曾有の大津波により、筆者が出発する予定であった仙台空港をはじめ、ほぼ全てのインフラが使用不能な状態に陥っていた。また、余震も続くなかで、筆者は北京行きを断念せざるを得ないと判断していた。震災発生から数日後、電気を含むインフラ機能が復旧しパソコンでのメールの確認が可能になったとき、筆者は文革科研のメーリングリストに受信されていた、先生方の間で交わされた夥しい量のメールを読むことが出来た。その内容はここでは触れないが、それらを全て読み終わった後、筆者のなかに存在していた、先の見えない研究生活を続けることへの迷い、より正確に言えば、研究人生に終止符を打つという思いは完全に消え去ったのである。この出来事は今日まで続く筆者の研究生活の、新たな原点となったと言っても過言ではない。佐治先生および文革関連の二つの科研費でご指導いただいた岩佐昌璋、宇野木洋、江上幸子、加藤三由紀、近藤龍哉、故・小谷一郎、故・代田智明、白井重範、下出鉄男、西野由希子、姫田光義、松浦恆雄各先生、福岡愛子氏に、この場を借りて、改めて心からの御礼を申し上げたい。

研究生活の原点ということからいえば、東海大学文学部文明学科での杉山文彦先生との

出合いは、筆者が研究者の道を志す上での大きな契機となった。大学に入学した頃の筆者は、「卒業後は地元に戻り、公務員になる」という漠然とした「人生設計」らしきものをもって
いた。少なくとも、自分が研究者としての道を歩むという選択肢はその時点では存在してい
なかったか、単なる「空想」の域を出るものではなかったように思う。しかし、杉山先生の
講義に参加させていただくうちに、中国近現代史への関心が少しずつ、そして確実に高まっ
ていった。ある授業の際、紅衛兵関連の二冊の新書についてのレポートを提出する、という
課題が出された。その時に提出した筆者の文章について、杉山先生から高い評価をいただい
たことを覚えている。筆者が文革に関心を持つきっかけとなったのは、この出来事だったか
もしれない。また、講義後には筆者を含む学生数人が先生の研究室へお邪魔し、四方山話に
ふけていた（冷静に考えてみれば、先生の研究の邪魔をしていなかったか、と思うのだが）。
そして、その際には講義とはまた違った内容の話しを伺うことができた。このような日々を
過ごすうちに、筆者は研究生活を志すに至ったのである。いま思い起こせば、杉山先生の研
究室でのあの時間は筆者にとってまさに、単なる「学生時代の思い出」以上の価値のあるひ
と時だったといえよう。筆者が「人生設計」を想定外の方向へ大きく変更するきっかけをく
ださった杉山先生に、この場を借りて感謝申し上げたい。そして、同じく東海大学文学部で
ご指導いただいた谷垣真理子先生にも、御礼申し上げたいと思う。谷垣先生には、筆者が大
学院への進学のために仙台に戻ってきて以降も、今日に至るまで様々な機会にご指導をい
ただいている。たとえば、筆者が初めて参加した科研費「返還後の香港の社会変容と周辺地
域への影響に関する調査研究」（1998-2000、基盤研究(A)）も谷垣先生のプロジェクトであっ
た。そして、今回の本書の出版も谷垣先生からのお誘いにより実現した。このように考える

と、谷垣先生との縁は不思議なものだと思う。その他にも、筆者の研究生活は多くの先生方との縁、そしてそのなかでいただいたご指導と激励に支えられながら、今日まで続いてきた。その全ての方々の名前を挙げることは出来ないが、ここでは特に筆者の研究に貴重なご教示をくださった瀬戸宏、大西広、石塚迅、加々美光行、趙宏偉、劉燕子各先生への感謝を申し上げたい。

加えて、コロナ禍においては周知のとおり、オンラインでの研究会が主流となっており、筆者もそのいくつかに参加している。ここでは特に、筆者をオンラインでの研究会に迎え入れてくださった天児慧、松谷曄介両先生への感謝を申し上げたい。天児先生の「アジア共創塾」、松谷先生の「中華圏プロテスタント研究会」等への参加は地方在住の筆者にとって、最新の研究成果にリアルタイムで触れることのできる貴重な機会である。

また、近年では筆者の地元である仙台でも、現代中国・アジア研究が本格化しはじめた。その中心的存在である阿南友亮先生のお誘いを受け、数年前から先生が仙台で立ち上げた現代中国関連の研究会に加えていただいている。その縁もあり、筆者は東北大学大学院法学研究科で現代中国研究に従事している大学院生諸氏と交流する機会を持てるようになった。大学院生時代の筆者が「同業者」が皆無という環境において文字通り孤軍奮闘状態で研究生活を送っていたことを思えば、まさに隔世の感がある。地元での研究会という新たな場に筆者を迎え入れてくださった阿南先生、松谷基和先生、そして東北大学大学院法学研究科の大学院生各位にも感謝申し上げたい。筆者がかつて心の中で思い描いていたように、東北、仙台の地が現代中国・アジア研究の新たな発信地となり、その成果が続々と世に送り出される日も、遠からず訪れるかもしれない。

私事になるが、筆者の研究生生活は諸先生方に加え様々な人々、とくに高校時代までを地元で共に過ごした友人、そして研究室を離れてから知遇を得た地元と全国の友人達によって支えられ、今日に至っている。その全ての人々の名前を挙げることはできないが、彼らにもこの場を借りて心からの感謝の意を表したい。ここで、本書が出版される時点で都内の大学で学んでいる若い友人とのエピソードを紹介したい。その友人は仙台市内の高校に通っていた時、既に拙稿の一つを読んでいたようである。そして、第一志望の大学への合格を一足早く勝ち取った高校三年生のある日、彼は筆者との雑談のなかでふと何かを思い出したかのように、このような問いを投げかけたのである。「文革の目的って、一体何だったんですか?」。この、十八歳の男子高校生の口から発せられた、余りにも本質的であると同時に最も難題の部類に入るであろう質問を前に、筆者はしばし絶句してしまった。この友人からの問いはいまも、そして今後も筆者にとっての「宿題」であり続けるであろう。その「答え」が出るまでには、かなりの時間を要しそうである。一人の文革研究者として、未来へ向かう中国と中国人が文革という、彼ら自身にとっても沈痛な「宿題」にいかに取り組むのか、そしてどのような「答え」を出すのか、そのためにいかなる試みを行ってゆくのかを見届けるため、さらにはこの若い友人からの「宿題」の「答え」を探し続けるためにも、文革研究を続けてゆきたい。

2022年2月 筆者

文化大革命と 21 世紀中国

The Chinese Great Proletarian Cultural Revolution and the 21st century China

中津俊樹 (Toshiki NAKATSU)

日本現代中国学会、アジア政経学会会員

(Member, The Japan Association for Modern China Studies. Member, Japan Association for Asian Studies)

専門は中国現代史。著書に『戦後日本の中国研究と中国認識：東大駒場と内外の視点』（代田智明監修、谷垣真理子、伊藤徳也、岩月純一編共著、風響社、2018 年）、主要論文に「「極左派」紅衛兵批判を巡る一考察—広東省「旗」派の事例」（『現代中国』第 78 号、日本現代中国学会、2004 年）、「中華人民共和国建国期における「レジオマリエ」を巡る動向について」（『アジア経済』Vol.57 (No.3)、アジア経済研究所、2016 年）、「1955 年「龔品梅反革命集団事件」に関する考察」（『中国 21』Vol.51、愛知大学現代中国学会編、東方書店、2019 年）等。

Email: junshutuan.nakatsu@gmail.com

2022 年 3 月発行（非売品）

現代中国研究拠点 研究シリーズ No.22

中津俊樹 著

文化大革命と 21 世紀中国

発行所 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL 03-5841-4904 FAX 03-5841-4905

東京大学社会科学研究所 現代中国研究拠点

<http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/kyoten/>

印刷所 大日本法令印刷株式会社
